

遊戯王5D's一疾風の決闘者一

佑馬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代のデュエリストが5D, Sに転生してライディングデュエルしたりアカデミアで学園生活送つたりするお話。思い付きで書いたので長続きするかは分かりません。

目

次

第1話
第2話
第3話
第4話
第5話
第6話
第7話
第8話
第9話

81 70 62 51 35 24 12 3 1

第1話

遊戯王。日本では最も有名なカードゲームの1つでありそのカードプレーの広さから構築の幅広さが特徴だ。同じテーマのデッキでもプレイヤーによつてそのデッキ内容は大きく異なる。そしてここにもその魅力にとりつかれた青年が1人いた。

「うーん……これ入れてもありきたりで面白くないしなあ。かといってこつち入れても噛み合わないし……」

見るからに頭を抱えて悩んでいるのは神代悠吾。どこにでもいるごくごく普通の大学生だ。そして彼を悩ませているのは今組んでいるデッキについてだつた。安定性をとるか爆発力をとるか、使いたいカードを最大限活かすにはどうすればいいか。考えることが多くあるがそれがデッキ構築の楽しみともいえる。

「ちよつと行き詰まつたし散歩がてら外の空気でも吸うかなー」

外に出てみるともう日が傾きかけていた。いくら休みとはいえ朝からぶつ通しでデッキ構築をしていたので軽く伸びをしただけで体がバキバキと大きな音をたてた。ひと仕事終えた心地よい疲労感と共に翌日には学校が控えているという憂鬱感もわいてきた。

『もう少しで完成しそうだし早速明日持つていつてデュエルするか！あ、やべレポートすんの忘れてた…今日は徹夜だな…』

そんなことを考えながらブラブラと歩いているうちに横断歩道に差し掛かつた。そして信号を確認しながら交差点を渡る。その時だつた。隣からものすごい勢いで突進してくる鉄の塊が視界に入った。一トラックだ。そう思った瞬間に手遅れで気づけば体が宙に浮いていた。体が地面と接触した瞬間も不思議と痛みは全くなく、ただ意識だけが遠のいていくのを感じた。

『う、嘘だろ……こんな形で死ぬなんて…まだやりたいことだつて山ほどあんのに…大学生活だつて全然エンジョイしてないし親孝行だつてしまいたいのに…』

薄れていく意識とは裏腹に頭は驚くほどクリアで多くの事を考えていた。これが走馬灯というもののかと納得してしまふほどだつた。

段々止まつていく心臓の鼓動を感じながら彼はこう願つていた。

『あーあ。。もつと…デュエルしたかつたなあ……』

閉じていく視界のなかで彼が最後にみたのは血に染まつた道路とあわてふためいている通行人だつた。その光景を最後に彼の心臓は動きをとめた。それと同時に彼のコートの中にあるカードが光つたことには誰も気づかなかつた。

そのカードは彼が最も信頼し、いつも持ち歩いているカード、『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』だつた。

第2話

卷之三

耳障りな音が部屋中に響く。この音を朝に聞くと憂鬱に感じる人が多くいるのではなかろうか。その正体は毎朝7時にセットされている目覚まし時計だつた。

——セ——な——朝——か——よ——

そう1人ぼやくと目覚まし時計の上に設置されているボタンを静かに押しアラームを止める。どこぞの漫画の主人公のように壊れるほど叩いたりはしない。ましてや投げつけるなどもっての他だ。モノは大切で、が彼のモットーである。

まだぼやけている視界で自分の部屋を見渡し頭を覚醒させる。そして覚醒していく意識のなかで思いだされるのは昨日確かに自分がトラックに跳ねられたということだ。

んで無傷なんだ…？確実に終わつたと思つたんだけど…」

よくできた夢だと考えることもできなかつたかあの感覚は夢と言つて終わらせるには鮮明すぎだつた。色々考えても頭が混乱するのでとりあえず後回しにしようと思ひカーテンを開けるとそこに広がつている光景に愕然とした。

窓から見えた景色はいつも彼が見慣れている東京の景色ではなく見たこともない高層ビル、3Dの立体映像、それはまるで漫画で見た近未来の光景そのものであつた。そして最も驚いたのがデュエルモンスターZという文字が至るところで目についたことだ。

戯王5D、Sで見た懐かしい単語だつた。

「これってまさか…いわゆるトリップやら転生とか言うやつか？」

二次小説では王道な、死んだと思つたら漫画やアニメの世界に飛ばされているというものが現実で、しかも自分がそうなるとは夢にも思つてなかつたので激しく動搖してしまう。

『落ち着け、俺。とりあえず状況を整理するんだ。まず昨日の事故は夢なんかじやない、現実に起こつたことだ。そしてここは東京じやなくて遊戯王、しかもD, Sの世界である可能性が非常に高い……』

現時点で分かつてゐる事はこの二つだ。幸運なことに自分の部屋は昨日までいた部屋と変わらなかつたのでとりあえず何か以前と違つてゐるモノはないか調べることにした。

「通帳はなくなつてないな、よしよし。免許証も……Dホイール用になつてるけどある……と。学生証は……なんだコレ、『デュエルアカデミア』? 年齢も17になつてるし……。細かいところは色々変わつてるけど大体前と同じ感じだな。あれを除いては……」

そう言つて目を向けた先には前の世界にいた時には絶対に見かけない機械があつた。それは遊戯王のアニメや漫画でしか見たことのないデュエルディスクだつた。

「コレ見ちゃうともう遊戯王の世界だつて信じるかしかないよなあ……とりあえず動かしてみるか!」

デュエルディスクに触れると機械音と共に起動する。それは正にアニメで見て憧れていた光景だつた。

「おーーすつげ! 早速デュエルしてみてえな! あ、そういうやーデッキどうなつたんだろ。」

思い出したようにデッキを探し回る。ここが本当に遊戯王の世界ならデュエルをすることが重要になつてくるのは間違いない。ならばこの世界ではデッキは命と言つても過言でない。

「うつそ……これだけしかねえの?」

部屋中探し回つて見つけ出せたのは昨日事故に遭う前に組んでいたデッキのみだつた。エクストラデッキに至つてはシンクロのカード以外全て無くなりしかもその一部のカードも消えていた。

「あんなに必死こいて集めたのに……まあこのカードがあるだけよしとするか。」

分かりやすくへコむ悠吾だつたが1枚のカードを見つけてその表情も和らぐ。そのカードは彼がずっと気に入つて使つてきた『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』だ。

「そーいや事故の瞬間も財布ん中いれてたつけ。こいつが俺をここに飛ばしたのかな…。つうか俺これからどうなるんだろ。」

漠然とそんなことを考えていた。とりあえず住むところはあるが貯金はそう多くないからいつまでも働かない訳にはいかないだろう。デュエルアカデミアに通っているようだがそこはどんな場所なのだろう。そもそも自分は本当に生きているのだろうか。一度考えるとめどなくそんな思いが浮かんでくる。

「ハア～色々考えてもしようがない。今日は月曜日だし多分学校あるよな。とりあえずデュエルアカデミアに行つてみるか！」

悩んでいるといつまでたつても動けないので無理矢理気持ちを切り替えることにした。アカデミアの制服らしき服を見つけて着替えるとデッキとディスクを持つと部屋を後にする。

『近くで見るとホントにデカイビルだ。道行く人もほとんどディスクつけてるしデュエルが生活に根付いてるってマジなんだな。』

先ほど窓から見たとはいえ実際近くでみてみるとその迫力はまるで違う。また、周りを歩いている人からもこの世界が遊戯王の世界だと実感させられる。

『いよいよWRGPの開催まであと300日！Dホイーラーよネオドミノシティに集まれ！』

ふとビルに設置されているディスプレイに目を向けると『ワールド・ライディング・デュエル・グランプリ』通称WRGPに関する宣伝映像が流れていた。

『WRGPってことはもうダークシグナーの件は終わってるみたいだな。サテライトもシティも1つになつてイリアステルが来る辺りかな。』

アニメを見ていた頃の記憶を呼び起こし時系列を整理する。幸いなことに彼が知っている時系列で物語が進んでいたのでネオドミノシティがいまどのような状況なのかは安易に知ることができた。

「ナビによるとここの角を曲がつて…あ、これが。」

携帯電話のナビ機能を頼りにたどり着いた施設は巨大で学校というよりは何かの研究施設のように見えた。

「ここがデュエルアカデミアか。教室とか全然分かんないけど大丈夫かな…。」

「よおーユーゴじやん。おーっす。」

どこから入つていいのか分からず校門の前でぼんやり呆けていると後ろから挨拶と共に肩を叩かれる。するとその瞬間悠吾は自分のなかに何かが流れ込んでくるのを感じた。

それはこの世界で生まれて今まで生きてきたという別の誰かの記憶だった。自分が知らないはずの人物の顔、その人物と仲良く話している自分の顔。最後に浮かんできたのは自分がDホイールを巧みに乗りこなしているという記憶だった。

「一ツ!」

時間にすると一瞬の出来事だったが彼にとつては数時間ほどにも感じた。なぜ今この記憶が流れ込んできたのか、それについて考え込もうとしたとき先ほどあいさつをしてきた少年が心配そうな顔で声をかける。

「ユーノ、大丈夫か？腹でも痛いの？」

「いや、いきなり声かけられてびっくりしただけだよ。それよか早く教室行こう。リュウジ」

何事もなかつたかのように反応するが内心悠吾は混乱していた。理由は分からぬが自分が今までこの世界で生きてきた記憶が急に頭のなかに流れ込んできたので無理はない。しかし今取り乱してしまうと目の前にいる赤髪の少年、万丈竜二に怪しまれてしまう。

悠吾の記憶によると竜二とは幼なじみで親友でありデュエルの腕を競ってきたことになつてている。自分の記憶のはずなのに全く身に覚えがないというのはなんとも変な感覚だが今は何もない風を装うしかない。

「つーかなんで昨日メール返信しなかつたんだよ。おかげで宿題めちゃ苦労したんだぞ。」

「あー…、昨日は早めに寝ちゃつてケータイ見てなかつた。てか宿題くらい自分でしろ」

そんな他愛ない会話をしながら教室を目指す二人。まさか自分が

事故にあつて今日の朝この世界に初めてきたとは口がさけても言えない。言つたところで信じてもらえるかも怪しいのだが。

「そういうや今日スタンディングデュエルのテストあつたよな。成績にも大きく関わるからデッキ調整してこいつて言われたけど、ユーロちゃん」と調整してきた?」

「マジか…忘れてた。まあなんとかなるか。」

たとえ知っていたとしても今持つているデッキは1つだからあまり関係はないのだかテストと聞くとやはり少々身構えてしまう。

「ユーロはそんな強くねーんだから下手したら落第かもなう。あの十六夜アキくらい強かつたら何の不安もねーんだろうけどよ。」

「えつ、あの十六夜アキ? リュウジ知り合いなの?」

「なに言つてんだよ。俺もお前も同じクラスだろ。」

「あつ…そつかそつか、そーだつた! 何でもない。」

この世界での記憶があつたとはいついさつき戻つたばかりで整理もできていないので細かいところは抜け落ちている。これからボロがでないように注意する必要がある。

「変なやつ…。まあ兎に角テストはお互い頑張ろうな!」

「おう! 絶対最高評価とつてやる!」

考えることは山ほどあるがまずは目の前の問題を片付けるのが優先だろう。テストを乗り切らないことには何も始まらない。その上アカデミアの授業もどんな内容なのか気になる。そう考えて改めて気を引きしめる。

教室のなかに入つてみると30人ほどが座れる意外とこじんまりした広さだった。外観が巨大であつたので教室も大学のような広い講義室を予想していただけに、ユーロからすると拍子抜けだつた。

『えーと…俺の席は確かあそこだつたよな。』

自分の席を思い出すだけで一苦労なのは我ながら滑稽だと感じた。正直竜二以外のクラスメイトはまだ顔と名前が一致しない。今日1日かけてゆつくり思い出すしかないと心のなかでため息を吐く。

「はーい全員席つけー、授業始めるぞー」

1人考えているうちにチャイムがあり、担任教師が教室に入つてき

て授業が始まる。テストがあるのは午後の1番最後の授業でそれ以外は普通の座学の授業らしいので先生には悪いが授業そつちのけで記憶の整理に当てさせてもらおうと悠吾は心のなかで決めた。

* * * * *

「ふうー…記憶整理するっていうのもなかなか疲れるな。」

机の上に突つ伏してぼやく悠吾。先程決めた通り授業全てを自分の記憶整理と今後の身の振り方について考えていた。おかげで授業内容はさっぱり覚えていない。しかしその甲斐あって学校生活で困らない程度にはなった。

「ユーネーおー次いよいよテストじゃん。やつべ、緊張してきた」

見るからに不安げな表情をして近づいて来たのは竜二だつた。朝は自信げにしていたのに直前になつた途端弱気になつてている。

しかし一方悠吾はというとこの世界に来て初めてのデュエルといふことで、テストとはいえ楽しみの気持ちの方が大きいほどだつた。「まあ負けても死にはしないんだし、デュエルだから楽しんだほうがいいでしょ。」

「そ、うなんだけどさー、強いやつとあたつてフルボッコにされたらと思うと…」

「お前…派手な髪色してるくせに気が小さいな。」

「俺は気が小さuinじやなくて纖細なんだよ!それに髪色関係ないだろ!」

顔をその赤い髪と同じくらい真っ赤にしてまくしたてる。その瞬間次の授業開始を告げるチャイムがなり担任教師が教室に入つてくる。

「はーい。じゃあ今日は以前から言つてある通り実践のテストするぞー。対戦の組み合わせはこつちで決めたからこのリストの順番でしてもらう。」

教室の前にあるディスプレイに対戦相手が表示されていく。生徒のなかには自分の対戦相手をみて嘆く者や歓喜の声をあげるものもいた。まだ勝敗も決まっていないのに呑気なものだと思いながら悠吾も自分の名前を探す。

『えーと…神代悠吾、と。あつた。対戦相手はツアン・ディレ? 誰だっけ…?』

記憶をたどつてもツアン・ディレという生徒のことは顔ぐらいしか分からぬ。元々絡んだことがあまりなかつたのかも知れない。

覚えていることといえば男子生徒にあたりが強く近寄り難い雰囲気があるということぐらいだ。

『うだうだ考へてもしようがないし俺は俺のできる全力をだそう。』

そう考へてデッキケースから自分の魂とも言えるデッキを取り出した。元の世界では何個もデッキを持っていたがこのデッキは何度も構築し直している悠吾が最も気に入っているカテゴリだ。この世界に持つてこれたのはこのデッキ1つで最初はショックだつたが1つを選ぶのだつたら間違ひなくこのデッキなので結果としては良かったかもしけない。

『よーし。デビュー戦だからな、頼むぞお前たち。』

アニメで見たようにカードに心のなかで語りかけてみる悠吾。改めて考へると恥ずかしさが込み上げてきたがそれと同時にドラゴンの咆哮が聞こえた気がした。

「じゃあ次、神代悠吾とツアン・ディレ演習場に来ーい」

いよいよ自分の出番になり氣を引きしめる悠吾。席を立つて教室をでようとするとき血相を変えた竜二に呼び止められた。

「ユーッ! お前の対戦相手最悪じやねーか! あのツアン・ディレが相手なんて、負け確定じゃん。」

「え!? そんなにあの人強いの?」

「お前…ツアン・ディレといえばこのアカデミアでも指折りの実力者だろ! 勝率だけでいえば学年トップだぞ!」

「へえーそれは面白いこと聞いた。精々ボコられないように頑張るよ。」

相手が強敵ということを聞き悠吾は不安がるどころか逆に喜んで笑みをこぼすほどだつた。

その気持ちのまま演習場へ向かうと対戦相手であるツアンは既に到着しており不機嫌そうな顔をしながら待ち受けていた。

「早くしてよね。さつさと終わらせてボク帰りたいし。」

「わりわり、待たせちゃって。じゃあ早速初めるか！」

『神代：あまり知らないけど今までの成績見る限りパツとしないしぶクの楽勝で終わりそうだね。』

ツアンは内心そんな事を考えながらデッキをシャツフルしディスクにセットする。二人ともいつでもデュエル可能だ。

「二人とも準備はいいな。それではデュエル開始イ！」

「「デュエル!!!」

悠吾LP4000

ツアンLP4000

教師の一聲でデュエルが開始される。ディスクに表示された先攻を知らせる表示。先攻は悠吾からスタートのようだ。

「よつし！俺のターンドロー！」

悠吾がもといた世界では先攻ドローは廃止されていたがここではマスターールール2が適用されているようだ。この世界では先攻から発動できる手札誘発などの妨害カードが少ないので手札6枚で先攻をとれるのはそれだけで有利に働く。

「んじゃ、初っぱながら飛ばすぞ！俺は手札から『SR三つ目のダイス』を通常召喚！」

SR三つ目のダイス／ATK300

「更にファイールドに風属性がいることで手札から『SRタケトンボーグ』は特殊召喚できる！」

SRタケトンボーグ／DEF1200

ファイールドに2体のモンスターを並べる。悠吾が使用する【SR】は竹トンボなどの昔のおもちゃをモチーフとしたテーマで主に風属性のモンスターを展開することに長けている。

「さあ、いくぞ！俺は『タケトンボーグ』に『三つ目のダイス』をチューニング！」

『三つ目のダイス』が光の輪となり、『タケトンボーグ』がその中心を3つの光となり駆け抜ける。

「十文字の姿持つ魔剣よ！その力で全ての敵を切り裂け！シンクロ召

喚！レベル6！『HSR魔剣ダーマ』！」

HSR魔剣ダーマ／ATK2200

けん玉をモチーフにしているであろうモンスターが現れる。悠吾はソリッドビジョンでのシンクロ召喚は初めてだつたので内心興奮しまくつていた。

『ヤツベー！ホントにシンクロ召喚成功した！そういうやテンションあがつて口上言つちやつたけど大丈夫かな？こつちの世界では普通だよね！』

「何ニヤニヤしてるの？気持ち悪いんだけど…」

シンクロ召喚が成功して大満足の悠吾を尻目に若干引いた目をするツアン。その視線に気付き悠吾はハッと我に帰る。

「ス、スマン。じやあ続きだ！『魔剣ダーマ』の効果発動！墓地の【S R】モンスターの『タケトンボーグ』を除外することであんたに500ダメージを与える！」

「やつてくれるね…」

ツアンLP4000→3500

「先制パンチはもらつたぜ！俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

悠吾

LP4000

モンスター

HSR魔剣ダーマ

罠・魔法

伏せ1枚

先攻は攻撃ができるが効果ダメージを与えることはできる。ダメージ量は500と多いわけではないが上級モンスターな加えりバースカードを2枚セットできれば上々といえるだろう。だがそれは相手が並みのデュエリストなら…という場合だ。

「ボクのターン、ドロー。」

静かにドローをして手札を眺めるツアン。彼女がどのような戦略をたててくるのか、どんなデッキなのか、悠吾は楽しみでならなかつた。

第3話

1ターン目を順調に終えた悠吾。しかし相手は学年トップの実力者であるツアン。今は順調でもいつひっくり返されるか分からない。

「ボクは手札から『紫煙の狼煙』を発動！ デッキからレベル3以下の【六武衆】モンスターを手札に加える。ボクは『真六武衆－カゲキ』を手札に！」

「げつー！ よりによつて【六武衆】かよ！ こりやヤバイかもな：」
ツアンの手札から発動された魔法カードをみてデッキ内容は把握できた。しかしそれ以上に【六武衆】というテーマにショックを隠しきれない。なぜなら悠吾のいた世界でも【六武衆】は、環境上位になつたことがある有名なテーマでその凶悪さは彼も身をもつて知っているからだ。

「手札からフィールド魔法『六武院』を発動！ 更にさつき手札に加えた『カゲキ』を通常召喚！」

真六武衆－カゲキ

ATK200

六武院

武士道カウンター

0→1

腕が四本ある武士のモンスターが現れる。その強そうな見かけとは裏腹に攻撃力は低い。だがこのモンスターの真価はその効果にある。

「その効果で手札からレベル4以下の【六武衆】を特殊召喚できるわ！
ボクは『六武衆の影武者』を特殊召喚！」

六武衆の影武者（チューナー）

DEF1800

六武院

武士道カウンター

1→2

先程の悠吾と同じようにモンスターを2体並べる。しかもそのう

ちの1体はチューナーモンスターだ。

「そつちもシンクロ召喚か？」

「その通り！ボクはレベル3の『カゲキ』にレベル2の『影武者』をチューニング！」

☆3+☆2+☆5

チューナーと非チューナーのモンスターが揃えばすることは決まっている。合計レベルは5。出てくるモンスターは用意に予想がついた。

「シンクロ召喚！来て！『真六武衆ーシエン』！」

真六武衆シエン

ATK2500

六武院

武士道カウンター2→3

「でたな…六武衆のインチキモンスター」

相手が六武衆のデッキである以上遅かれ早かれ出ることは分かつていたが実際目の当たりにすると落胆を隠せない。

「イ、インチキ！人のカードに対して失礼ね！」

「う…でもその召喚のしやすさでその効果は強すぎだろ！」

悠吾が嘆くのも無理はない。『真六武衆ーシエン』は攻撃力が2500と上級モンスターレベルであり1ターンに1度相手が発動した魔法・罠カードを無効にして破壊する効果がある。それ単体でも厄介だが【六武衆】が持つ展開力と合わせると更に驚異的だ。

「つたく…フィールドに【六武衆】が存在するので『六武衆の師範』を特殊召喚！」

六武衆の師範

ATK2100

六武院

武士道カウンター3→4

悠吾の反応に憤りを見せつつもちやつかり次のモンスターを展開する。これで上級モンスターが2体。

「バトル！『師範』で『魔剣ダーマ』に攻撃！」

「え？ 攻撃力は『魔剣ダーマ』のほうが高いぞ、プレミか？」

「ボクがプレイミスなんてとんだ口マンチストね！ フィールド魔法『六武院』は乗っている武士道カウンターの数×100ポイント相手モンスターの攻撃力を下げるわ！ 今のつている武士道カウンターは4つ、よつて『魔剣ダーマ』の攻撃力は400ポイントダウン！」

H S R 魔剣ダーマ

A T K 2200→1800

「そういうことか！ なら、トラップ発ど：」

そう言いかけてぐつところえる。確かにこのカードを発動すれば『魔剣ダーマ』は破壊されずにすむ。しかしフィールドに『シエン』がいる以上発動しても無駄打ちになつてしまふだろう。

悠吾 L P 4000→3700

「ぐつ…」

「まだ『シエン』の攻撃が残つてるよ！ 『シエン』で神代にダイレクトアタック！」

悠吾 L P 3700→1200

「うおっ！」

いくらソリッドビジョンで直接的なダメージがないといえどもその迫力は本物さながらだ。初めてデュエルディスクを使ってデュエルをする悠吾にとってその衝撃は尚更大きかった。

「ライフを大きく削られたな…まあこの位はしようがないか」

「随分余裕ね。ライフもフィールドのアドバンテージも圧倒的にボクが有利なのに」

「まだライフが0になつたわけじゃないしこつから逆転した方が面白いいじやん？」

「ボクと対戦した人は追い込まれると大体諦めた表情になるのに何でみせるツアン。」

『ボクと対戦した人は追い込まれると大体諦めた表情になるのに何でコイツは…というか神代つてこんなキャラだつけ…』

「ボクはカードを1枚伏せてターンエンド。」

ツアン

L P 3 5 0 0

モンスター

真六武衆—シエン

A T K 2 5 0 0

六武衆の師範

A T K 2 1 0 0

魔法・罠

伏せ 1 枚

「よし、俺のターンドロー。」

これで悠吾の手札は4枚。枚数としては心もとないがなんとかドローしたカードを見て何とかなりそうだと安心する。

「先ずは魔法カード『スピード・リバース』を発動！墓地から【S R】モンスターを特殊召喚する！」

「蘇生して展開されると厄介だからここで止めさせてもらうわ！『シン』で無効！」

今、悠吾のフィールドにモンスターはなく、モンスターを蘇生させる魔法カードも潰されてしまった。しかしここまでの展開は彼にとって折り込み済みだ。

『スピード・リバース』は不発か…だつたらこっちだ！俺は『S Rベイゴマックス』を特殊召喚！このカードは自分フィールドにモンスターがないとき特殊召喚できる！

S R ベイゴマックス

A T K 6 0 0

「特殊召喚に成功したことでデッキから【S R】モンスターの『S R ケトンボーグ』を手札に！」

「特殊召喚効果の上にサーチ効果まで？そっちの方があつぽどインチキじやないの！」

「う、それを言われるとキツいな…」

『S R ベイゴマックス』は手札消費1枚でシンクロ召喚まで繋げられる。シンクロ召喚するのに基本2枚以上のカードが必要になるこの世界では反則級の強さだろう。

「《タケトンボーグ》は場に風属性がいるとき特殊召喚できる！更に《タケトンボーグ》の効果でこのカードをリリースしてデッキから【SR】チューナーを特殊召喚する！俺は《SR赤目のダイス》を特殊召喚！」

前のターン《タケトンボーグ》は特殊召喚されそのままシンクロ素材になつたが今回はその効果まで使用される。風属性しか特殊召喚できなくなるが風属性主体の【SR】を使う際そのデメリットは無いに等しい。

SR赤目のダイス

D E F 1 0 0

「特殊召喚された《赤目のダイス》の効果で《ベイゴマックス》のレベルを4に変更するよ！」

SRベイゴマックス

☆3↓4

「レベル4の《ベイゴマックス》にレベル1の《赤目のダイス》をチューニング！」

「合計レベルは5…《シエン》と同じ…」

☆4+☆1=☆5

「その躍动感溢れる剣劇の魂、シンクロ召喚レベル5！《HSRチャンバラライダー》！」

HSRチャンバラライダー

A T K 2 0 0 0 → 1 6 0 0

「さあバトルだ！《チャンバラライダー》で《師範》を攻撃！この瞬間、《チャンバラライダー》の効果で自身の攻撃力を200ポイントアップさせる！」

HSRチャンバラライダー

A T K 1 6 0 0 → 1 8 0 0

「それでもまだ《師範》には届かないよ。もしかして伏せカード…？」

「永続トラップカード《追走の翼》を《チャンバラライダー》を対象に発動！そして《追走の翼》の更なる効果発動！このカードの対象となつたモンスターがレベル5以上のモンスターと戦闘する場合相手モン

スターを破壊してターン終了までその攻撃力分『チャンバラライダー』の攻撃力をアップする!』

H S R チャンバラライダー

A T K 1 8 0 0 → 3 9 0 0

『『チャンバラライダー』は一度のバトルフェイズで2回攻撃できる、続けて『シエン』に攻撃!』

「つ…調子にのっちゃつて…」

ツアン

L P 3 5 0 0 → 1 9 0 0

「俺はカードを1枚伏せる。これでターンエンドだ。この瞬間『チャンバラライダー』の攻撃力はもとに戻る」

H S R チャンバラライダー

A T K 4 1 0 0 → 2 1 0 0

悠吾

L P 1 2 0 0

モンスター

H S R チャンバラライダー

A T K 2 1 0 0

伏せカード

1枚

悠吾のターンが始まる前は彼のライフは大きく削られフイールドのモンスターも全滅していたのに終わってみればピンチなのは一転してツアンの方になつてしまつた。

『『シエン』がやられた上にライフもこんなに…もう油断しない。』

「ボクのターン、ドロー」

『さーて、なんとか逆転したけど多分このまま押しきらせてはくれないよなあ…』

【六武衆】の強力なモンスターである『シエン』を撃破しライフも大きく削ったにも関わらず悠吾の顔色は優れない。ツアンの手札は今ドローで4枚、【六武衆】の展開力を考えると逆転には十分すぎるほどだろう。

「《真六武衆》ミズホ」を通常召喚！」

真一六武衆ミズホ

ATK1600

六武院

武士道カウンター

4→5

「《ミズホ》ってことはあれも手札にあるのか？」

「さつきの《シエン》の時といい【六武衆】について知ってるみたいね
：残念だけどアンタが考えてる《シナイ》は手札にはないわ」

この《真六武衆》ミズホ」というカードは単体ではそれほど性能が高いわけではないが《真六武衆》シナイ」と組み合わせることでその強さを發揮できる。しかし今《シナイ》はツアンの手札にはない。

「だからこうするわ！トラップカード発動《諸刃の活人剣術》！ボクの墓地から【六武衆】モンスター2体を特殊召喚させる」

六武衆の影武者（チューナー）

DEF1800

真六武衆カゲキ

DEF2000

六武院

武士道カウンター

5→6

1ターン目にシンクロ素材として使用されたモンスターが再びフィールドに舞い戻る。《諸刃の活人剣術》は1枚で2枚のモンスターを呼び戻せる強力な罠カードだがエンドフェイズに呼び戻したモンスターの攻撃力の合計ダメージを負つてしまふリスクがある。

「これで場に【六武衆】が3体…このカードは場に【六武衆】が2体以上存在するとき特殊召喚できる。これがボクのエース！きて、《大将軍紫炎》！」

大将軍紫炎

ATK2500

赤い鎧で刀を携えている姿は【六武衆】を率いる王の名にふさわし

いものだつた。

「さて、《追走の翼》が邪魔だね：《ミズホ》の効果を発動！《カゲキ》をリリースして《追走の翼》を破壊するわ！」

「やつべ…」

《追走の翼》は戦闘、効果で破壊を無効にし、上級モンスターとの戦闘においては無類の強さを發揮する。ただ。ピンポイントで破壊されるとその強力な効果は意味を持たない。

「レベル3の《ミズホ》にレベル2の《影武者》をチューニング！シンクロ召喚レベル5《真六武衆—シエン》！」

☆3+☆2=5

真六武衆—シエン

ATK2500

「《大将軍紫炎》で俺は1ターンに1度しか魔法・罠カードしか発動出来ない上に発動したとしても《シエン》で無効にされるのか…これはキツいな…」

「フン、ちょっと手こずつちやつたけどこれで終わりよ！バトル、《シエン》で《チャンバラライダー》を攻撃！」

攻撃力が200アップするが《シエン》の攻撃力を上回るには至らず切り倒されてしまう。

悠吾

LP1200→1000

「でも《チャンバラライダー》が破壊されて墓地に送られた時除外ゾーンから【SR】を手札に加えられる。《タケトンボーグ》を手札に。」

「今更遅いわ！《紫炎》でダイレクトアタック！これで終わり！」

《紫炎》の一撃が悠吾を襲いそのエフェクトにより辺りが煙に包まる。完璧に決まり悠吾のライフが尽きたかのように見えたが…

「ゲホッ…ソリッドビジョンつて煙までんのか、すげえな…」

悠吾

LP1000

「な、なんでダメージを受けてないの？確かに通つたはずなのに…」

「ああ、俺は《紫炎》の攻撃宣言時墓地の《三つ目のダイス》を除外し

て攻撃を無効にしたんだ。」

『まさか発動していたつて言うときが来るとは…1回言つてみたかつたけど本当にアリなんだな。』

「クツ…ボクはターンエンド」

ツアン

L P 1 9 0 0

モンスター

大将軍紫炎

A T K 2 5 0 0

真六武衆一シエン

A T K 2 5 0 0

伏せカード

なし

なんとか首の皮1枚繋がつたが2体のモンスターによるロツクは強力だ。正直魔法・罠カードでの逆転は難しいだろう。どうしたもののかと考えているとエクストラデッキからドラゴンの咆哮が聞こえた。

『まだ…どうやらお前に頼るしかないみたいだな。』

「俺は《SRダブルヨーヨー》を召喚！効果で墓地から《赤目のダイス》を特殊召喚！」

S R ダブルヨーヨー

A T K 1 4 0 0

S R 赤目のダイス（チューナー）

D E F 1 5 0 0

「確かあのサイコロモンスターはレベル変更できるんだつけ…ということは狙いは高レベルシンクロ…」

「ま、そんなことだ。俺は《ダブルヨーヨー》のレベルを6に変更！」

S R ダブルヨーヨー

☆4↓6

「俺はレベル6の《ダブルヨーヨー》にレベル1の《赤目のダイス》をチューニング、その美しくも雄々しき翼翻し光の早さで敵を討て！」

☆6+☆1=☆7

「シンクロ召喚！レベル7『クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン』！」

クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン

A T K 2 5 0 0 0 → 1 8 0 0

現れたそれは白い竜。口上の通りその翼の色は美しい緑色をしており対戦相手のツアンでさえその姿に思わず見とれてしまうほどの輝きを放っていた。

「綺麗…それに何か不思議な力を感じる…」

「コイツは俺にとつても特別だからな。んじゃそろそろいかせてもらうよ！バトルフェイズ、俺は『クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン』で『大将軍紫炎』を攻撃！」

「忘れた？『六武院』の効果で『クリアウイニング』の攻撃力は1800。『紫炎』に攻撃したら返り討ちよ。」

「勿論知ってるよ！だから罠カード『魂の一撃』を発動！俺のライフを半分払い、それが4000より下回っている数値分『クリアウイニング』の攻撃力をアップする！つまり3500を『クリアウイニング』の攻撃力に加えるぜ！」

悠吾LP10000→500

「そんなトラップ発動させるとと思う？ボクは『シエン』の効果を発動して『魂の一撃』の発動を無効にする！」

文字通り悠吾渾身の1枚を非常にも無効にするツアン。しかしこれこそが彼の真の狙いだ。

「それを待つてた！この瞬間『クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン』の効果発動！レベル5以上のモンスター効果が発動した時それを無効にして破壊する！ダイクロイック・ミラー!!」

『クリアウイニング』が己の羽を光らせたかと思うと衝撃波を放つ。その光を浴びた『シエン』は粉々に爆散していく。

「そして破壊したモンスターの攻撃力分『クリアウイニング』の攻撃力をアップする！」

「そん、な…？」

『シエン』の効果が無効になつたことで『魂の一撃』が有効になる！

クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン

ATK1800→4300→7800

「こ、攻撃力7800!…」

「行け! 『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』! 旋風のヘルダイブ
スラッシュヤー!」

悠吾が攻撃名を叫んだ直後身体を激しく回転させつつ『紫炎』に突進を開始する。

弾丸の如く迫った『クリアウイング』が赤い甲冑の鎧武者に大穴を穿ち、数秒後に大爆発が発生した。

「きやああああ!!」

ツアン

LPI900→0

WIN 悠吾

「そこまで! 勝者神代!」

審判を務めていた担任教師からデュエル終了の合図がくだされる。それを聞いて悠吾は緊張の糸が切れたのかその場に座り込んでしまった。

「はあー疲れた…ソリッドビジョンのデュエルってこんな体力使うのか。勝つたはいいけどかなりギリギリだつたし…」

ふとツアンの方に目を向けるとデュエルが終わつたというのに一点を見つめたままブツブツ何かを言つていた。

「ボ、ボクが負けた…嘘でしょ…しかもあんなパツとしないやつに…」

「えつと、ツアンさん? 大丈夫? もしかして体調でも悪い?」

ツアンの様子を見かねて悠吾が声をかける。その声でようやく我にかえるツアンだがそれと同時に悔しさがこみ上げてくる。

「な、なんでもない! ボク帰る!」

そう言つて顔を反らすと一目散に演習室を出ていつてしまつた。

一方一人ボツンと残された悠吾は訳も分からずポカンとしていた。
「行つちゃつた…俺何かいらん」と言つたかな…。」

てつきりこの世界ではデュエルをすれば分かりあえると思つていたので勝負に勝つたとはいえ後味が悪かつた。

「さーて、俺も帰るかな。あ、教室寄つて竜二と一緒に帰ろう。」
テストという目の前の課題を解決して一安心したが彼にはまだ解決しなければならない問題が山積みだ。それを考えるだけで頭が痛くなるが今はデュエル初勝利の余韻に浸ることにした。

第4話

「ユーゴー！ 昨日のドラゴンどうしたんだよ!? お前あんなカード持つてたのか!？」

「だーかーらー、あれは貰つたつて昨日も言つただろ」

翌日教室に入るなり竜二が驚いた様子で悠吾に話しかける。どうやら悠吾がツアンにデュエルで勝つたという噂だけでなく彼が使用する『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』のことも噂になつているようだ。教室に来る道中嫌に視線を感じたのは恐らくそのせいだ。特に竜二には昨日教室に戻つた瞬間から質問攻めにされていた。つい最近まで持つていなかつたカードを急に使用しているシーンを見るとしようがないかもしれない。

「あー眠い…朝きつつ…」

そんな回りの噂とは裏腹に悠吾は眠そうに大きなあくびをする。

「また夜更かしか？ もしかして面白いゲームでも見つけた？」

「お前はいいよな呑氣で…そんなんじやねーよ」

実はアカデミアから帰宅した後自分がこれからどうすればいいのか、何をしなければいけないのか、そんなことを考えていたらいつの間にか朝になつていた。

結局答えは出ずに出づに今に至るというわけだ。

「つつても噂つて1日でこんな広がんのか…学校てのはどこの世界でも同じだな。」

「何だよお前。まるで別の世界から来たような言い回しして。…もしかしてその歳で厨二か?」

悠吾の不自然な物言いに怪訝そうな顔をする竜二。確かに端から見たらイタイ厨二病患者にしか見えない。それを否定するかのように悠吾は首をブンブンと激しく振る。

「んなワケねーだろ！ 只の一般論だ！ 一般論！」

「ははっ、焦つちやつて。あ、それはそうと気を付けろよ。お前がデュエル強い上にあんなドラゴン持つてるつて広まつたら挑戦してくる輩も出てくるかもよ。」

「え!?なんだそれめんどくせーな…」

そんな談笑をしている悠吾をじつと見つめる一人の生徒がいた。
『ボクに1回勝つたくらいで偉そうに…でも昨日のボクの態度ちょっと悪かつたかも…べ、別にアイツに対しても悪いと思ってるからそういうわけじゃないからね!それにしてもあいつの間にあんな強く…』

心の中で誰に言うわけでもないのに言い訳をしているのは昨日悠吾に敗北したツアンだ。今までほとんど敗北を知らなかつただけに自分に泥をつけた悠吾のことが朝から気になつて仕方がない。

その上ツアンが記憶している限り悠吾の強さなどせいぜい中の上といったところだつた。それが自分と渡り合えるまで急に実力をつけたというのがどうにも気になる。

そしてツアンと同じような疑問を持った生徒がもう一人
『彼が昨日使つていたドラゴン…あの感じはシグナーのドラゴンと凄く似てる…』

その人物は、これまた成績トップクラスの十六夜アキだ。悠吾のデュエルの強さにも驚かされたがそれ以上に驚いたのは彼が使用する『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』についてだ。それは彼女たちチーム5D'sが持つているシグナーの竜の気配と一致するものがあつた。

『もしかして彼もシグナーなの?でも腕に痣なんてなかつた…それに彼があのドラゴンを使つてるの見たの昨日が初めてだし…』
アキも悠吾の変わりつぱりに困惑しているようだ。

そんな二人の視線など露ほども気付かず悠吾は今日もアカデミアの授業に臨むのであつた。

* * * * *

「よーし、じゃあそろそろ帰るか」

授業全てが終了し家に帰ろうと席を立つ悠吾。しかしそんな彼を呼び止める竜二。

「ユーホ、ちよい待ち!今日暇か?」

「一応予定無いけど…どした?」

予定は無いとは言つてみたものの、放課後はネオドミニシティを見て回るつもりだった。というのもこの街で暮らすことになつた以上どんな町並みか少し散策したいと思つての考えだつた。

「お！ だつたらライディングデュエルでもどうだ？ なんかお前強くなつてるし久々に俺とデュエルだ！」

「Dホイールか…」

『確かにDホイールのライセンスは持つてたから一応運転はできるんだろうけど大丈夫かな…』

ネオドミニシティのことを見て回ろうと思つていたので竜二の申し出はむしろ好都合なのだがDホイールの運転というところに少し不安があつた。しかし今は何事もやつてみることが重要だろう。

「いいぜ！ 久しぶりにスカッとしたいし」

「そうちなくつちや！ ジャあ各自Dホイール取りに帰つてダイダロスブリッジのハイウエイ集合な！」

「おつけ、じゃあまた」

そう言うと竜二は嬉しそうに急いで教室からでていく。そんな竜二を見ながら自分もDホイールを運転するのを楽しみにしていた。しかしここである重大なことに悠吾は気づく。

「俺つてDホイール持つてたつけ…」

* * * * *

場所は変わり悠吾宅の駐車場。昨日蘇えった記憶によると自分はDホイールをのりこなしていたので恐らく自分用のものを所有しているだろうと考え自分のマンションの地下にある駐車場に来ていた。そこである白いDホイールが目にはいる。

「このDホイール：《クリアウイング》に似てる…」

自分のエースモンスターに似たDホイールが目に入り思わずその機体に手を触れる。

「うつ…ぐつ…何だ…」

触れた瞬間何かが流れ込んでくる感覚が悠吾を襲つた。それは昨日竜二に触れられた時に起きたものとよく似ていた。今回流れ込んで来たのはこのDホイールと自分が幾度となく激戦を繰り広げてき

たという記憶だつた。

「また、これが…自分の姿で自分の知らない記憶があるつてのは変なもんだな…というかこの記憶つて誰のなんだ…？俺のもんじやないのは確かだけど」

この感覚には馴れない上に自分のこの世界での記憶は誰のものなのだろう。考えだと分からることはまだまだ多く、謎は深まるばかりだ。

一ピピピピピ、ピピピピ。

突如悠吾の懐でアラームのような音がなる。正体は彼の携帯電話の着信音だ。どうやら竜二からの電話のようだ。

「ユーゴー！お前遅いって！何してんだ！今どこ？」

電話に出るなり怒鳴る竜二。時間を確認してみると約束の時間を大きくすぎていた。

「お、おう…わりい、まだ家だわ」

「はー!?こつちはもう着いてるぞ！早く来いよ！」

「分かった分かった、なるべく早く行くよ」

電話を切ると急いでDホイールにまたがりエンジンをかける。昨日もテストが終わって家に帰った後夜遅くまで色々考えていたが結局何も分からなかつた。ならば考えるより動いてみよう、そうすれば自分の求める答えが見つかるだろう。

「さーてリュウジ待たせてるし飛ばすか！」

アクセルを思い切り踏み込むとDホイールがそれに応えるかのようすに大きく加速する。

「うお…思つたよりパワー強え…でも風が気持ちいな。」

Dホイールには初めてのるがその風を切る感覚はどこか懐かしさがあつた。まるで風と1つになりどこまでも加速していく…元の世界で感じたものとは違う恐らくこの世界での彼の記憶だ。

「お待たせ、リュウジ！」

勢いよくとばしたおかげで思つたよりも早く到着した。しかし遅刻したことには違ひはないのだが。

「まつたく、待たせすぎだつつの！その代わり今日はとことんデユエ

ルしてもらうぞ！」

「へーへー、分かつたつての。でもその前にもうちょいツーリングしね？」

「いいよ、俺ももうちょい馴らしたいし。」

そう言うと二人はハイウエイに繰り出す。いくら操縦の仕方が分かつたと言つてもまだ細かい動作をするのは難しい。これからライディングデュエルをするならば緻密な駆け引きや高度なドライビングテクニックが必要だ。なるべくそれを取り戻さなければ自分が思つた通りの戦術は出来ないだろう。

『ふう、集中して運転すると結構キツイな。これをデュエルしながらするつてのはもつと疲れるだろうな』

今のライディングデュエルのルールでは確かオートバイロットは廃止されていたはずだ。つまり己の運転技術がかなり重要なってくる。

「ユーゴー！そろそろ始めようぜ！」

しごれを切らしたのか竜二がデュエルを始めようと言う。悠吾もこれから始まるライディングデュエルにワクワクしており元気よく応える。

「ああ、いいよ。はじめつか！」

その言葉を皮切りに2台のDホイールが並走を始める。興奮か緊張か分からぬが頬を汗が伝うのが分かる。そしてDホイールのデュエル機能を起動させる。

「スピードワールド2、セットオン！」

ライディングデュエルで使用されるフイールド魔法《スピードワールド2》がセットされる。それと同時にコースが設定され、準備が整つた合図がされる。

あとはデュエル開始の宣言をするだけだ。悠吾はアニメで遊星が言つていたように叫ぶ。

「ライディングデュエルアクセラレーシヨン!!」

竜二も同時に叫ぶ。二人はその宣言を皮切りにアクセルを全開にしてスピードをアップさせる。ライディングデュエルにおいて先攻

を決めるのは第一コーナーを制した者だ。悠吾はコーナーが近づいてもスピードを落とすことなく突つ込む。

「ユーホ!? そのスピードで突つ切るつもりかよ?」

「まあ見てろ! 行くぞ!」

コーナーが近づき一瞬スピードを落とした竜二に対しスピードを緩めなかつた悠吾のほうがわずかに第一コーナーに入るのが速かつた。デイスクには悠吾が先攻と表示される。

「今日は随分攻めるじやねーか!」

「まあな、悪いけどこのままデュエルも勝たせてまらうよ!俺のターン!」

勢いよくドローする悠吾。Dホイールから手を離して運転するのは正直まだ怖かつたがこんなことで恐怖を抱いているようではこの先戦えない。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンドだ!」

悠吾 LP 4 0 0 0

モンスター

セットモンスター

魔法・罠

伏せ二枚

勝たせてもらう、と豪語したもののその立ち上がりは堅実かつ緩やかだ。手札があまり良くなく前回のツアン戦のように1ターン目からシンクロ召喚はできない。

「どうした? 偉く大人しいじやねーの! でもこつちは遠慮なくいかせてもらうぞ、俺のターン!」

悠吾

SPC0→1

竜二

SPC0→1

ここでお互にスピードカウンターが1つずつ。ライディングデュエルではこのスピードカウンターをどのように使うかが重要なってくる。なぜなら魔法カードは全て『S p』でありこれを使用

するにはスピードカウンターの数がものを言うからだ。

「俺は手札から『S pーオーバー・ブースト』を発動！ エンドフェイズにスピードカウンターが1になるかわりにその数を4増やす！」

竜二

S P C 1 → 5

S P C の数が1つでは発動できるS pの数は非常に限られる。しかし竜二はその弱点をS P C を増やすことで解決した。

「更に『S pーエンジエル・バトン』を発動！ カードを二枚ドローして手札を1枚墓地に送る！」

ドローしたカードを確認準備が整つたのだろう。その口角をにやりとあげる。

「いいカードだ！ 俺は『XXーセイバー・ボガーナイト』を通常召喚！」

XXーセイバー・ボガーナイト

A T K 1 9 0 0

「[X]ーセイバー」か：昨日の【六武衆】と同じで展開力に優れたテー
マだな」

悠吾の言つたとおり【X-セイバー】は非常に展開を得意としているテーマだ。放つておくとてがつけられなくなるだろう。

『ボガーナイト』の効果で手札から『XXーセイバー・フラムナイト』を特殊召喚！

XXーセイバーフラムナイト

A T K 1 3 0 0

前回のツアンのデュエルを彷彿とさせるスタートだ。モンスター効果により2体のモンスターをフィールドに並べる。あの時は即座にシンクロ召喚に繋げたが今回は違うようだ。

「バトルフェイズにはいつて『ボガーナイト』でセットモンスターを攻撃だ！」

『ボガーナイト』の振り上げた刃が悠吾のセットモンスターに襲いかかる。守備表示なのでダメージをうけることはないがモンスターは破壊される。

「守備モンスターは『S R電々大公』だ。破壊される。」

「先制ダメージはもううぜー！『フラムナイト』でダイレクトアタックだ！」

次のモンスターが悠吾にダメージを与えると向かってくる。し

かしこのままわざわざ大ダメージを与えてやるつもりは毛頭ない。

「トップ発動！『オフェンシブ・ガード』！モンスターの直接攻撃宣言時攻撃力を半分にして俺はカードを一枚ドローする！」

X-Xセイバー/フラムナイト

ATK1300→650

「攻撃力が半分に…だがダメージは受けんだろう、食らいやがれ！」

悠吾

LP4000→3350

「ぐつ…これがライディングデュエルの衝撃か…スタンディングとは大違ひだ」

直接的なダメージはないにしてもDホールにのつているだけでその感覚は全く違つてくる。少しよろけながらなんとか堪える。

「メイン2にはいる。そして俺はレベル4の『ボガーナイト』にレベル3の『フラムナイト』をチューニング！」

「来やがつたか…」

☆4+☆3=☆7

「交差する刃持ち、屍の山を踏み越えるー・シンクロ召喚！出でよ、レベル7『X-Xセイバー/ソウザ』！」

X-Xセイバー/ソウザ

ATK2500

「決まつたぜシンクロ召喚！ダメージも与えたし幸先いいんじやねえの？俺はカードを伏せてターンエンドだ！この瞬間俺のSPCは1に戻る。」

竜二 LP4000

モンスター

X-Xセイバー/ソウザ

ATK2500

魔法・罠

伏せ 2 枚

「俺のターン！」

悠吾

S P C 1 ↓ 2

竜二

S P C 1 ↓ 2

『《ソウザ》の攻撃力は 2500…あいつの攻撃力を越えるにはつと
⋮』

「俺は《SRバンブーホース》を通常召喚！」

SRバンブーホース

A T K 1 1 0 0

「効果により手札から《SR赤目のダイス》を特殊召喚！」

SR赤目のダイス

D E F 1 0 0

竜二に負けじと悠吾もモンスターを 2 体揃える。しかしどちらの攻撃力も《ソウザ》には及ばない。

「確かにそのモンスターはレベル変更効果を持つてたな！大方《バンブーホース》のレベルを変えてあのドラゴンでも呼ぶつもりか？」
「主役のあいつはまだまさ！まずはこいつでいく！俺は《赤目のダイス》で《バンブーホース》のレベルを 3 に変更する！」

SRバンブーホース

☆4↓☆3

「俺もシンクロだ！レベル 3 の《バンブーホース》にレベル 1 の《赤目のダイス》をチューニング！」

☆3+☆1=☆4

「幾千の顔を持つ迷宮の影よ、その鋭き刃で混沌の闇を切り裂け！シンクロ召喚、レベル 4 《HSR快刀乱破ズール》！」

HSR快刀乱破ズール

A T K 1 3 0 0

レベル 4 のシンクロモンスター。攻撃力だけみると下級のモンスターにも負けてしまうだろう。

「何だよ！御大層にシンクロしたわりには大したことねーな！そんな
んじゃ俺の『ソウザ』は超えらんねーぞ！」

「焦んなよ。バトル！俺は『ズール』で『ソウザ』を攻撃だ！」

『ソウザ』の攻撃力は2500に対し『ズール』は1300普通にぶつ
かっても破壊されしかも大ダメージを食らってしまうのは必至だ。
「ダメージステップ、『ズール』の効果で攻撃力を2倍にする！」

H S R 快刀乱破ズール

A T K 1300→2600

攻撃力が2倍になりそのまま『ソウザ』を両断する『ズール』。ダ
メージは100と少ないがシンクロモンスターを破壊できたのはい
い流れだ。

「やつてくれたな…」

竜二

L P 4000→3900

「俺はこのままターンエンドだ！さあお前もそろそろエース見せてみ
るよ！」

「言われなくても【X—セイバー】の切り札をいまだしてやるよ！」

まだお互いに1ターンしか経過していないが二人のテンションは
最大といつても過言ではない。今から竜二のターン、というところで
Dホールドの画面にある反応が写る。

「何だ…？未登録のDホールド？」

それは二人の後ろから2台のDホールドが近づいてくることを知
らせるものだつた。別にDホールド自体は珍しくもないがデュエル
中に、しかも未登録のDホールドには不信感をいだいた。

「デュエル中になんだよ…テンション下がるな…」

竜二も気づいたようで露骨に嫌そうな顔をする。一方悠吾はその
2台のDホールドにコンタクトをとろうと通信昨日をONにしたそ
のときだつた。

一バトルロイヤルモード強制発動、これよりこのデュエルはバトル
ロイヤルルールで行われます。一

悠吾と竜二のDホールドから急にバトルロイヤルモードに移行す

るアナウンスが流れ始めた。

「な、なんだこりや？ ユーゴ、お前なんかしたか？」

「いや、俺じゃない！ どうやら向こうのDホイールが起動させたらし
い！」

突然の出来事に困惑する二人だがどうやら犯人は近づいてくる2台のDホイールらしい。どうしたものかと考えていると二人のDホイールに通信がはいった。

「クツクツク…お前たち二人には我らとデュエルをしてもらう
「それもバトルロイヤルモード方式でな。」

聞こえてきた声は明らかに機械で変えたような不自然な声だつた。
しかし今はそんなことは重要ではない。悠吾の頭のなかにはある出来事が甦る。

『た、確かにこいつらゴーストとかいう機械のDホイーラーだ…それで
使うカードは…えっと、なんだつけ…』

肝心なところが思い出せない悠吾だつたが今は深く考えている余裕はない。突如現れた脅威に今はただデュエルに集中するより方法はなかつた。

第5話

「なんだつてんだよ…畜生…」

突如乱入してきたゴーストに対し悪態をつく悠吾。そんな悠吾に對し竜二は未だ状況をつかめずにいた。

「こいつらまさか巷で噂のゴーストとかいうやつか？二人組なんて聞いてねえよ！しかもなんでよりによつて俺たちに…」

その様子からかなり動搖しているようだつた。ゴーストといえば今ネオドミノシティを騒がせている謎のDホイーラーで遭遇したデュエリストは悉くクラッショウさせられている。そんな相手が自分の目の前にいるとあつては竜二の狼狽っぷりも納得できる。

「私のターン、ドロー！」

竜二

S P C 1 → 2

悠吾

S P C 1 → 2

ゴースト 1

S P C 0 → 1

ゴースト 2

S P C 0 → 1

そういう考へていてるうちにゴーストのターンがスタートしてしま

う。このままではまざいと悠吾は竜二に声をかける。

「竜二！今はデュエルに集中だ！一人で乗り切るぞ！」

「お、おう！やつてやらあ！」

悠吾の言葉によつて冷静に戻る竜二。しかしゴーストがどんなカードを使つてくるか全く予想できない。

「私は『ワイズ・コア』を召喚！」

ワイズ・コア

A T K 0

あらわれたのは何かの卵のように見える機械の玉だ。しかし攻撃力はたつたの0、攻撃するのを目的に召喚されたわけではなさそう

だ。

『攻撃力0、なんかネタがありそうだな…』

「そしてカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

ゴースト1

L P 4 0 0 0

モンスター

ワイズ・コア

A T K 0

魔法・罠

伏せ 2 枚

攻撃力0のモンスターを棒立ちでターンエンドとは予想とは違
静かな立ち上がりだ。それを見た竜二は、ハツと鼻で笑う。

「攻撃力0のモンスター棒立ちでターンエンドかよ？ とんだ拍子抜け
だな！」

「煽るな竜二！ あれで終わりとは思えねえ…」

普段なら悠吾も多少気を緩めるだろうが原作を知っているだけに
油断はしない。しかしどうしても肝心なところが思い出せない。

『《ワイズ・コア》…何だ…見たことあるはずなのに思い出せない…そ
もそもどこで見たんだ…？』

ここで悠吾は自分の前世の記憶が消え始めていることに気づいた。
この世界での記憶が蘇るに比例して前世の記憶が消えているようだ。
「私のターン！ ドロー！」

竜二

S P C 2 → 3

悠吾

S P C 2 → 3

ゴースト1

S P C 1 → 2

ゴースト2

S P C 1 → 2

自分のことについて新たな事実を発見したはいいが、今はそんなこ

とを考えている暇はない。

「この瞬間私はトラップカード『スパーク・ブレイカー』を発動！私のフィールドのモンスター1体を破壊する！私は『ワイズ・コア』を破壊！」

「なんだと？」

二人目のゴーストのターンに入つたと思うと一人目のゴーストが自分のモンスターを破壊する。わざわざ自分のモンスターを破壊するということは何かカラクリがあるのだろう。

「この瞬間破壊された『ワイズ・コア』の効果を発動！デッキから『ワイゼルT』、『ワイゼルA』、『ワイゼルG』、『ワイゼルC』、『機皇帝ワイゼル∞』を特殊召喚！」

ワイゼルT

ATK500

ワイゼルA

ATK1200

ワイゼルG

DEF1200

ワイゼルC

ATK800

機皇帝ワイゼル∞

ATK0

「一気に5体のモンスターを特殊召喚だとお!?インチキ効果も大概にしゃがれ!!」

どうやら効果破壊をトリガーにしてデッキからモンスターを呼ぶ効果だつたようだ。正直5体のモンスターの特殊召喚には驚いたが1体1体のステータスはそれほど高くない。

「クククク：恐ろしいのはこれからだ。私は『機皇帝ワイゼル∞』の効果を発動！このカードの攻撃力は存在するパーティの攻撃力分圧倒的する！合体せよ、機皇帝ワイゼル！」

4体のパーティが『機皇帝ワイゼル∞』に集まつていき1つのロボットへと姿を変える。

「モンスターが合体したのか？あんなカード見たことねえぞ！」

機皇帝ワイゼル∞

A T K 0 → 2500

「ワラワラ湧いてただけじゃなくてそんな効果まで持つてたのか
⋮」

初めて見る合体するモンスターに各々驚きを隠せない二人。だが
今はもう一人のゴーストのターンであることを忘れてはいけない。

「私は『スカイ・コア』を召喚！」

スカイ・コア

A T K 0

二人目のゴーストが召喚したのは先ほどと似ているが若干カラーリングの異なったモンスターだ。

「そして手札から『S p一ハイスピード・クラッシュ』を発動！ S P C
が2以上あるときフィールドのカードと自分のカードを破壊する！
私が破壊するのは『スカイ・コア』と神代悠吾の『快刀乱破ズール』を
破壊する！」

稻妻がゴーストと悠吾のフィールドに降り注ぎ『スカイ・コア』と
『ズール』を粉々に粉碎する。本来なら2対1交換でアドバンテージ
としてはイマイチだが今回に限ってはそうとも言えない。

『ズール』が⋮しかもあの『スカイ・コア』とか言うやつが破壊されつ
たつてことは…」

「ククク…その通り。『スカイ・コア』が破壊されたことによりデッキ
から『スキエルT』、『スキエルA』、『スキエルG』、『スキエルC』、『機
皇帝スキエル∞』を特殊召喚する！」

スキエルT

A T K 600

スキエルA

A T K 1000

スキエルG

D E F 300

スキエルC

A T K 4 0 0

機皇帝スキエル∞

A T K 0

「そして合体せよ！機皇帝スキエル！」

機皇帝スキエル∞

A T K 0 ↓ 2 2 0 0

悠吾の予想どおり《スカイ・コア》が破壊されるとデツキから5体のモンスターが特殊召喚される。《機皇帝ワイゼル》と違い見た目は鳥のような形状をしている。

「ま、また合体しやがった…このモンスターがゴーストの戦術なのか…？」

1ターン目から主力モンスターを出してきたゴースト二人。それに対しても悠吾も竜一もファイールドはがら空きでこのままでは大ダメージは免れない。

「バトル！私は《機皇帝スキエル∞》で神代悠吾にダイレクトアタック！」

ここはライフポイントが僅かに少ない悠吾を狙つてきた。ダイレクトアタックを受けてしまうと2200のダメージを受けてしまう。悠吾のファイールドには1枚の伏せカードがある。これでダメージを軽減できればなんとかなるだろう

「おい！悠吾！防御札あるなら発動しろ！このままじゃやべーぞ！」

「分かつてるつて！罠発動！《ロスト・スター・ディセント》！墓地からシンクロモンスターの《H S R 快刀乱破ズール》を守備表示で蘇生する！」

H S R 快刀乱破ズール

D E F 0

その効果により守備力は0、表示形式も変更出来ないがこの攻撃を耐えてダメージを無くすには十分だろう。モンスターを残すことはできないが大ダメージを受けるよりかは遥かにマシだと考えとつた行動だつた。

「悪あがきを…では《ズール》粉碎せよ！《機皇帝ワイゼル∞》！」

そう言つて《機皇帝スキエル8》から《ズール》に向かつてビームが放たれ直撃して破壊される。本来ならソリッドヴィジョンの映像演出のみだが、悠吾の体にはまるで本当に近くで爆発が起きたかのように爆風がふりかかる。

「な、なんだこれ…まるでモンスターが本当に破壊されたみてえに…」「悠吾！大丈夫か！」

悠吾のDホイールが爆風により左右に大きく振られ危うくクラッシュュしてしまいそうになるが懸命にバランスをとりなんとか持ちこたえる。

「今のは一体なんだ？ソリッドビジョンにこんな機能ないはずだぞ！」

悠吾本人は自分の身に起きたことを理解することができなかつた。その問い合わせるようにゴーストが笑いながら解説する。

「ククク…気づいていなかつたのか？このデュエルではモンスターの攻撃、及びプレイヤーのダメージが実体化するのだ！」

「アア!?なんだつてそんな…」

ソリッドヴィジョンは確かにリアルだがそれが実体化するなど聞いたことがない。にわかには信じがたい話だが今自身の身に起きたことを考えると、それは本当のようだ。

「まだ終わりではない！機皇帝は5体で1つのモンスターだがそれぞれのパーツは1体のモンスターとして扱う！よつて追加攻撃させてもらう！」

「ウソだろ…オイ…」

パーティの数は《スキエル8》を除いて4体。《スキエルG》は守備表示だが他のカードは攻撃表示。大ダメージは避けられない。

「まずは《スキエルA》でダイレクトアタック！」

「う、うがあああああ！」

悠吾

3350→2350

ダメージが実体化すると考え咄嗟に身構えるが予想を遥かに超える衝撃が体全体をかけぬける。意識が飛びそうになるのを必死でこ

らえる。

「まだだ。次は『スキエルC』でダイレクトアタック」

「う…がつ……」

悠吾

L P 2 3 5 0 → 1 9 5 0

追い討ちでダメージが入る。先ほどまでとはいかないが感じるダメージは本物だ。その証拠にDホイールの装甲が一部吹き飛んでしまった。

「がつ…ハア……。てめえ後でちゃんと修理代払えよコラア…」

「まだ軽口を叩く元気があるとはな。しかしその様子を見るにもう限界だろう。次の攻撃でクラッシュするがいい。『スキエルT』でダイレクトアタック。」

最後の攻撃の爆発が悠吾を襲う。辺りに立ち込める煙の中からフラフラと大きく蛇行しながらも悠吾は無事に出てきた。

悠吾

L P 1 9 5 0 → 1 3 5 0

「た、耐えたぜ……。アテが、ハアっ…外れたな…」

「強がりを…私はカードを2枚伏せてターンエンド」

「エンドフェイズ、破壊された『ズール』の効果で墓地から『SRバンブーホース』を手札に加える…」

ゴースト2

A T K 4 0 0 0

モンスター

機皇帝スキエル∞

A T K 2 2 0 0

スキエルT

A T K 6 0 0

スキエルA

A T K 1 0 0 0

スキエルG

D E F 3 0 0

スキエルC

ATK400

罠・魔法

伏せ2枚

「お、俺のターン…ドロー。」

なんとかデッキからカードを引くが正直長引くと不利になると感じた。速攻で決めないと悠吾のほうがもたなくなる。となるとあのドラゴンに頼るしかないだろう。

『長期戦になるところちがヤベえな…このターンで出来るだけ大ダメージ与えて竜二につなげねえと！』

「自分フィールドにカードが無いので『SRベイゴマックス』を特殊召喚！」

SRベイゴマックス

DEF600

【SR】の中核となるモンスターが特殊召喚される。このカードならばアドバンテージを稼ぎつつ悠吾の切り札を出すことができる。

『ベイゴマックス』の効果で『SRタケトンボーグ』を手札に加えて…そのまま特殊召喚…！」

SRタケトンボーグ

DEF1200

「通常召喚せずに2体のモンスターを並べたか」

「まだこれからだ…ハア、『タケトンボーグ』の効果でリリースすることでデッキからSRチューナーを特殊召喚する…俺は2枚目の『赤目のダイス』を特殊召喚！」

SR赤目のダイス

DEF100

『赤目のダイス』の効果で『ベイゴマックス』のレベルを6に変更する…！」

昨日のツアン戦でも見せた『ベイゴマックス』1枚からの展開パターん。昨日と違う点はシンクロ召喚するモンスターが悠吾のエースモンスターという点だ。

「俺はレベル6となつた《ベイゴマックス》にレベル1の《赤目のダイス》をチューニング！」

《ベイゴマックス》が6つの光の輪となりそのなかを一筋の光が駆け抜ける。レベルの合計は7。となれば呼び出されるモンスターは1体しかいない。

「その美しくも雄々しき翼翻し、光の速さで敵を討て！シンクロ召喚！現れる！レベル7《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン

ATK2500

「来たあ！ユーゴのドラゴン！これで一気に逆転だ！」

竜二がガツツポーズをして喜ぶ。昨日のツアン戦を見ていたからこそ《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》がどれだけ頼りになる存在が分かる。いくらゴースト達が未知のモンスターを使つていようと逆転できる、そう考へている2人を見てゴーストはまるで無駄なあがきだと言わんばかりに嘲笑う。

「ククク…。確かに見たことのないモンスターだがシンクロモンスターである限りこの機皇帝に勝ち目はない。」

「ああ、そうかい…だつたらオマケだ！俺は手札から《SRシェイブーメラン》を召喚！」

SRシェイブーメランATK2000

《シェイブーメラン》の効果で召喚したターン攻撃できない…が、もうひとつ効果発動！このカードを守備表示にしてモンスター1体の攻撃力を800ダウンさせる！

「なるほど。機皇帝の攻撃力を下げに来たか…」

「俺はこの効果を《クリアウイング》を対象に発動する！」

「何!?」

今まで余裕な表情を崩さなかつたゴーストが初めて動搖した声をあげる。自分モンスターにデメリットのある効果を使うのだ。悠吾が何が企んでいることは明白だ。

「この瞬間《クリアウイング》の効果発動！レベル5以上のモンスターがモンスター効果の対象になつたときそのモンスターを破壊し、破壊

されたモンスターの攻撃力を《クリアウイニング》に加える！」

クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン

ATK2500→4500

「成る程…厄介な効果を持つて いるな。」

大幅に攻撃力をアップした《クリアウイニング》。攻撃するパートによつてはワンショットキルも可能だ。ゴースト2人のフィールドにはいずれも5体の機皇帝パートが存在している。悠吾は迷いなく攻撃力の低いパートを狙いに行く。

「てめえにやさつき散々イジめられたからな…お返しだ！《クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン》で《機皇帝スキエルC》を攻撃！旋風のヘルダイブスラッシャー！」

これが通れば与えるダメージは4100。一撃でライフを全て削り取ることができる。

「そんな単調な攻撃が通ると思つて いるのか？私は罠カード《強制終了》を発動。《スキエルC》を墓地に送ることでバトルフェイズを終了する。」

「なつ…伏せカードか…！」

勝負を焦るあまり相手の伏せカードのケアを怠つてしまつた。いつもならそのようなミスはしないがダメージ実体化、初めてのライディングデュエルなどにより心に隙が生じてしまつた。

「クソッ…俺はカードを伏せてターンエンド…この瞬間《クリアウイニング》の攻撃力も元に戻る…」

悠吾LP1350

モンスター

クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン

SRシェイブーメラン

ATK2500

魔法・罠

伏せ1枚

相手に大ダメージを与えるチャンスを逃してしまつたせいで苛立つてしまふ。その様子を見たゴーストが追い討ちをかけるように

悠吾を挑発する。

「シグナーにも匹敵する力を持つていると思つたがどうやら見込み違うのようだ。」

「我らの機皇帝には遠く及ばない。」

『ダメージを全然与えられなかつた…このままじゃ…』

先程まで冷静だつたのにも関わらず激しく動搖してしまった悠吾。スタンディングデュエル又は普通のライディングデュエルならまだしもこれはダメージが実体化するデュエルだ。一步間違えれば命を落とすかもしれない命懸けの戦いだけに、頭が真っ白になつてしまふ。

「ユーゴー！あいつらの言うことに耳貸すな！相手のペースに呑まれたら勝てるデュエルも勝てねえぞ！」

竜二の呼び掛けに我に帰る悠吾。このデュエルが始まつた時には竜二も今の悠吾のように動搖していたが今は落ち着いておりむしろその目には闘志が宿つてゐる。これはやはり経験の差ということなのだろうか。自分もしかりしなければと気合いを入れ直す。

「分かつてるとつて！次のターン頼んだぞ！」

「任せときな！俺のターン！」

悠吾

S P C 3 → 4

竜二

S P C 3 → 4

ゴースト1

S P C 3 → 4

ゴースト2

S P C 3 → 4

竜二の手札はこのドローで3枚。相手のフィールドには未知の機皇帝が存在している上に『強制終了』がある。単純に考えれば、ゴーストはあと4回攻撃を止めることができる。『強制終了』を攻略できるかがこのデュエルの流れを掴めるかを決めるだろう。

『ユーゴー…もうこいつを傷つけさせやしねえ！』

悠吾のダメージを受ける姿を見てこれ以上ゴーストに好き勝手させる訳にはいかないと考え己の闘志に火をつける竜一。そして手札から1枚のカードを選び勢いよく召喚する。

「俺は手札から『XXセイバー・ダークソウル』を通常召喚！」

XXセイバー・ダークソウル

ATK100

『Xセイバー』は戦士族が多いイメージだが現れたのは死神のような格好をしたモンスターだった。しかしその攻撃力は100と低い。「トラップ発動！『ガトムズの緊急指令』発動！墓地から『ソウザ』と『フランナイト』を特殊召喚！』

悠吾に破壊された『ソウザ』とそのシンクロ素材に使われた『フランナイト』が復活する。条件が厳しいとはいえ1枚で2体のモンスターを並べられるのはやはり強い。

「自分フィールド上に『Xセイバー』が2体以上存在するとき手札から『XXセイバーフオルトロール』は特殊召喚できる！」

XXセイバーフオルトロール

ATK2400

「これでシメだ！『フォルトロール』の効果で墓地から『XXセイバーレイジングラ』を特殊召喚！」

Xセイバーエアベルン

DEF200

『すげえ…モンスターを5体も並べた！でも…』

いくらモンスターを並べたとしてもゴーストのフィールドには『強制終了』がある。しかし竜一もそれは折り込み済みだ。

「俺はレベル3の『ダークソウル』にレベル3の『フランナイト』をチューニング！赤きマント翻し、剣の舞で敵を討て！シンクロ召喚！『XXセイバー・ヒュンレイ』！」

XXセイバー・ヒュンレイ

ATK2300

『ヒュンレイ』の効果！お前らのフィールドの『強制終了』と伏せカード2枚を破壊するぜ!!』

『ヒュンレイ』がその手に持った刀を1振りするとゴースト2人の魔法・罠カードが破壊される。

「ぐつ…」

「やつてくれたな…」

これには流石に顔をしかめるゴースト達。これで攻撃を妨げる者は何もない。

「もう一丁！俺はレベル6の『フォルトロール』にレベル3の『エアベルン』をチューニング！」

合計レベルは9。『X-セイバー』最強のモンスターが呼び出される。

「白銀の鎧輝かせ、歯向かうものの希望を碎け！シンクロ召喚！『X-X-セイバーガトムズ』!!」

ATK3100

その姿はまさに『X-セイバー』の隊長に相応しい風格を纏つていた。それに加え竜二のフィールドには2体の『X-セイバー』シンクロモンスターがいる。これを見て悠吾は正直驚いていた。

『上級モンスターを3体召喚した上に伏せカードのケアまで：俺は『クリアウイング』だけで精一杯だったのに…』

昨日のデュエルアカデミアの試験前には緊張していた素振りを見せていただけに今の竜二に違和感を覚えると共に頼もしくも思えた。

「バトルだ！まずは『ヒュンレイ』で『スキエルA』に攻撃！」

「伏せカードを破壊したからといい気になるな。『スキエルG』の効果。攻撃を一度無効にする。」

「なにつ!?そんな効果までありやがったか…！」

『ヒュンレイ』の一太刀を『スキエルG』がバリアを発生させ弾く。しかし攻撃を防げるのは一度だけだ。

「今度こそぶつ壊してやる！『ソウザ』で『スキエルA』を攻撃！」

ゴースト2

LP4000→3000

「ぐうつ…」

初めてゴーストにダメージが入り、今まで崩れなかつた表情が痛み

で歪む。それと同時にまた《スキエル♂》の攻撃力が下がる。これでパーティが2個減つたことになり上昇した分の攻撃力も大きく下がる。

「ユーボの仇だ！ 続けて《ガトムズ》で《スキエルT》に攻撃！」

ゴースト2

3000→500

その残りのパーティを容赦なく叩き割る《ガトムズ》。2500というこのデュエルで最大のダメージを与える。しかしゴーストは顔をしかめるが怯む様子は全くなき。

「これほど機皇帝のパーティを削られるとは…嘗めてかかっていたがお前の方は認識を改める必要があるな。」

「削りきれなかつたか…でも俺にできることはない。ターンエンド。」

竜二LP4000

モンスター

XX-セイバーガトムズ

ATK3100

XX-セイバーヒュンレイ

ATK2300

XX-セイバーソウザ

ATK2500

魔法・罠

伏せ1枚

止めをさすことは流石に出来なかつたが機皇帝のパーティを大幅に削ることに成功した上に竜二のフィールドには高レベルシンクロモンスターが3体。対抗するには十分だろう。それを見て思わず竜二に声をかける。

「竜二…お前スゲーな。まさかここまで展開するとは思わなかつた

⋮

「何言つてんだよユーボ、これくらいいつものデュエルでやつて見せてるだろ」

何せこの世界に来たのはつい最近で竜二ともデュエルはしたことがないので驚いてしまつた。慌てて平静を装う。

「あ、ああ……そ、うだな、このままで押しきろうぜ！」

確実に流れは悠吾たちに傾いて来ている。しかしゴーストは追い込まれているのにも関わらず平静さを崩さない。

「私のターンドロー。」

ゴースト1

S P C 4↓5

ゴースト2

S P C 4↓5

悠吾

S P C 4↓5

竜二

S P C 4↓5

淡々とカードを引くゴースト。そしてそのドローしたカードを見て怪しく微笑む。

「お前たちに本当の恐怖を教えてやる……しかしあ前のそのドラゴンは厄介だ。手札から『S pーシンクロ・シャット』を発動。お前のフィールドのシンクロモンスター『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』の効果を無効にする。」

光の鎖が『クリアウイング』を捕らえガチガチに結びつける。これは強力な効果を使うことができない。

「これで邪魔者がいなくなつた。私は『ワイゼル∞』の効果発動！フィールドのシンクロモンスター、『XXーセイバーガトムズ』を吸収する！」

「なんだと!?」

『ワイゼル』の核から触手が発生し、『ガトムズ』を捕らえ引きずり込んでしまつた。そしてその高い攻撃力を我が物としてしまつた。

機皇帝ワイゼル∞

A T K 2 5 0 0 → 5 6 0 0

『ガトムズ』が…そ、うか…！だから『クリアウイング』の効果を…『クリアウイング』の効果があれば機皇帝を封殺できるだろう。しかし今その効果は封じられておりなにもできない。

「攻撃力5600…しかもシンクロキラー効果まで…」

闘志に燃えていた竜二ですらこの光景を目の当たりにして愕然としている。そして悠吾、竜二の二人の頭に同じ感情が浮かぶ。

“絶望”

ゆつくりとしかし確実にその言葉が頭のなかを占めていく。その感情は必然的に表情に現れる。

「良い表情になつたな、もつと絶望しろ。」

まるでこれからどういたぶるか考えているようにゴースト達は不敵に笑う。

第6話

『《クリアウイング》が封じられた上に攻撃力5600…どうする…!?』

悠吾と竜二、そしてゴースト2人による命懸けのデュエルも中盤に差し掛かっていた。しかしその戦況は明らかに悠吾達の不利的状況だつた。

「ククク…ようやく良い顔になってきた。今まで何人もDホイーラーを葬ってきたが自分のエースであるシンクロモンスターを吸収すると決まつてその顔をする」

この瞬間を待つていたかのように下劣な笑みを浮かべるゴースト。ただDホイーラーを潰すだけではなく如何に残酷に倒すかを楽しんでいるようだ。

「バトルだ！今度こそ引導を渡してやる！機皇帝ワイゼル∞で《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》を攻撃！」

《機皇帝ワイゼル》のコアの部分からレーザーが放たれてクリアウイングを撃ち抜こうとする。この攻撃を通れば悠吾の食らうダメージは3100。ライフは0になる上にクラッシュではすまないだろう。「させるか！罠発動！《ガード・ブロック》！ダメージは0になりカードを1枚ドローできる…ドロー！」

「フン…モンスターを盾に自分はライフを繋いだか…だがまだパートモンスターの攻撃が残っているぞ？《ワイゼルA》で神代悠吾にダイレクトアタック！」

《クリアウイング》が破壊されてしまいフィールドががら空きになってしまった悠吾。その矛先が再び悠吾に向かう。

「それもとおさねえ！俺は手札から《SRメンコート》の効果発動！このカードを攻撃表示で特殊召喚して攻撃表示モンスターを守備表示にする！これでお前のパートはただの木偶だ！」

「チツ…これも防ぐか。私はこれでターンエンドだ。」

ゴースト1

LP4000

フィールド

機皇帝ワイゼル∞

D E F 0

ワイゼル A

D E F 0

ワイゼル T

D E F 0

ワイゼル G

D E F 1 2 0 0

ワイゼル C

D E F 6 0 0

魔法・罠

伏せ 1 枚

ゴーストによる猛攻を紙一重でかわす悠吾。今はなんとか凌いでいるか長くは持たないだろう。

「私のターンドロー。」

ゴースト 1

S P C 5 ↓ 6

ゴースト 2

S P C 5 ↓ 6

悠吾

龍二

S P C 5 ↓ 6

次は龍二によつてライフを大きく削られたゴーストのターンだ。ライフだけでなくモンスターも残るパートは『スキエル∞』と『スキエル G』の二枚だけだ。

「勿論私も『機皇帝スキエル∞』の効果を使わせてもらう!『XXーセイバーソウザ』を吸収する!」

『ワイゼル∞』と同様に『スキエル∞』も同じ効果を持つているようだ。先に核の『スキエル∞』を破壊すべきだったと心の中で悔やむ龍二。

しかしそんな後悔もむなしく『ソウザ』は吸収されていく。

機皇帝スキエル∞

ATK200→2700

「『ソウザ』まで…」

自分のモンスターを2体も吸収されてしまい悔しそうな表情をする竜二。まさか自分の信頼するシンクロモンスターがこのような形で利用されるのはいい気分ではない。

「更に『スキエルA3』を通常召喚！」

まるで昆虫のトンボの形を模したモンスターが召喚される。その名前から察するに先ほどの『スキエルA』の上位モンスターであることが伺える。

機皇帝スキエル∞

ATK2700→3900

『ワイゼル∞』程ではないにしてもその攻撃力は並大抵のモンスターでは突破できない高さになる。

『スキエル∞』を攻撃表示に変更。そしてバトル、『スキエル∞』で『SRメンコート』に攻撃!!

狙うのは勿論ライフケイントが少ない悠吾。今まで紙一重で攻撃をかわしていたが正直もう防ぐ手立てはない。

『クソッ…もう防御札がねえ…交通事故で死んだつてのに今度はバイクでクラッシュして死ぬなんてな……』

前触れなく死んだと思つたら遊戯王の世界に別人として甦つた。それなのにたつた数日でまた命の危機に晒されるとは思わなかつた。覚悟を決めて目を閉じた悠吾の耳に竜二の声が響く。

「罠発動、『地縛霊の誘い』！」

その宣言と同時に悠吾を狙つていた『スキエル∞』の動きがピタリと止まる。

「このカードの効果で『スキエル∞』の攻撃対象は俺が決める！対象を『XX-セイバーヒュンレイ』に！」

『スキエル∞』の放つレーザーが悠吾から『ヒュンレイ』に照準を変え粉碎する。幸い『メンコート』の効果で守備表示になつていた為ダ

メージは無いのだが衝撃はそのまま襲う。

「うおつ！ダメージ無いのにこの衝撃かよ…！危なかつたな…」「サンキュー竜二…正直かなりヒヤヒヤした。」

「なーに、気にすんなって！これくらい屁でもないっての！」

自分のシンクロモンスターを利用され歯がゆい思いをしているのは竜二の方だろうに明るく振る舞っている。ならば自分も最後まで諦める訳にはいかない。

そんな二人の掛け合いを見てゴーストが顔をしかめる。

「くだらん庇い合いを…ならば貴様もこの痛みを味わうがいい！『スキエルA3』で万丈竜二にダイレクトアタック！」

「うおおおおおお…ッ…！！…確かにこりやキツいな…」

竜二

L P 4 0 0 0 → 2 8 0 0

先程の攻撃で自分のモンスターを失ってしまったので竜二のフィールドはがら空きだ。『スキエルA3』の攻撃をモロに受けてしまう。何度かDホールを回転させるがクラッシュしそうなのを何とかこらえる。

「竜二…大丈夫か!?」

「お、おう…正直どんなもんかと思つてたけどこりや予想以上だな…」
悠吾ほど連発で受けてはないにしろ流石にダメージ実体化は堪えたようだ。

「メイン2に入り私は『スピード・ワールド2』の効果発動。SPCを4つ取り除き手札のSP1枚につき800のダメージを与える。私の手札のSPは1枚。よつて800のダメージを万丈竜二に与える。」

ゴースト2

S P C 6 → 2

「ぐつつつ…！効果ダメージまで…」

竜二

L P 2 8 0 0 → 2 0 0 0

『スピード・ワールド2』の効果を使い確実にライフを削つてくるゴー

スト。たとえ守備モンスターでターンを稼いだとしてもこうして地道にライフを削られてはいつか負けてしまう。

「私はこれでターンエンド。」

「俺のターン…ドロー!!」

ゴースト1

S P C 6 ↓ 7

ゴースト2

S P C 2 ↓ 3

悠吾

S P C 6 ↓ 7

竜二

S P C 6 ↓ 7

このドローで手札は2枚。このターンで逆転できなければ勝ち目は薄いだろう。そう考え恐る恐るドローしたカードを見る。そのままドローしたカードを発動させる。

「俺はS P Cーシフト・ダウン発動!・S P Cを6つ取り除いてカードを2枚ドローする!」

悠吾

S P C 7 ↓ 1

「…」でドローカードをひいたか…!」

新たに2枚のカードをドローする悠吾。その2枚のカードをドロー見て悠吾の頭の中で一筋の光の道が浮かぶ。

これなら…いける!

「俺は手札から『S Rダブルヨーヨー』を通常召喚!」

S Rダブルヨーヨー

A T K 1 4 0 0

「このカードの効果で墓地から『S R赤目のダイス』を特殊召喚する!」

S R赤目のダイス

A T K 1 0 0

再び特殊召喚されるこのデッキの核となるチューナーモンスター。

チューナーとそれ以外のモンスターが揃えばすることは1つだ。

「俺はレベル4の《メンコート》にレベル1の《赤目のダイス》をチューニング！その躍動感溢れる、剣劇の魂。シンクロ召喚！《H S R チャンバラライダー》！」

H S R チヤンバラライダー

A T K 2 0 0 0

「何かと思えば高々攻撃力2000のシンクロモンスターか…そのまままわしきモンスターもすぐに機皇帝に吸收させてやる。」

折角のシンクロモンスターも機皇帝の攻撃力の前には無力に見えてしまう。しかし悠吾はチヤンスを見逃さなかつた。

「お前の機皇帝は攻撃力はあげられても守備力はどうやらそのままみてえだな！さつきの《メンコート》で《ワイゼル∞》は守備表示になつた上にその守備力は0だ！今なら竜二の《ガトムズ》を取り戻せる！」

「ちつ…気づいていたか…」

《機皇帝ワイゼル∞》の効果は吸収したシンクロモンスターとフイールドに存在するパートの攻撃力を上昇させる効果であり守備力までには影響しない。それが今回仇となつたのだ。

「バトル！俺は《ダブルヨーヨー》で《機皇帝ワイゼル∞》を攻撃!!」「させるか！《ワイゼルG》の効果で攻撃を1度無効にする！」

《機皇帝ワイゼル》の腕パートがバリアを開いて《ダブルヨーヨー》の攻撃をかわす。しかしそれは前のターンで見てるので折り込みずみだ。

「まあそう来るよな。でもその効果はもう使えねえ！《チヤンバラライダー》で《ワイゼル∞》を攻撃！この瞬間《チヤンバラライダー》の効果で攻撃力を200上昇させる！」

H S R チヤンバラライダー

A T K 2 0 0 0 ↓ 2 2 0 0

無敵かと思われた《機皇帝》は《チヤンバラライダー》の一撃であえなく粉々にされてしまう。そして《ワイゼル∞》が破壊されたことにより竜二の墓地に《X X - セイバー ガトムズ》が帰つてくる。

「ぐうううつ……『ワイゼル∞』が破壊されたことにより、残りのパーティモンスターはすべて破壊される…」

核が破壊されるとその周りのパーティもそれに呼応するかのように次々と破壊されていく。

『あの8つて名前のつくパーティがシンクロモンスターを吸収したり他のパーティを繋げる心臓部になつてゐるのか…』

シンクロモンスターを吸収したり、一気に5体のパーティを展開するという未知のモンスターだつたがどうやら弱点はあるようだ。
そしてゴーストのフィールドはがら空きだ。

『《チャンバラライダー》は2回の攻撃が可能だ！ゴーストにダイレクトアタック！』

H S R チャンバラライダー

A T K 2 2 0 0 → 2 4 0 0

ゴースト

L P 4 0 0 0 → 1 6 0 0

このデュエルではじめてライフを削る悠吾。そのダメージはライフポイントの半分以上を削る大ダメージだがこれ以上は何もできない。

『クソッ…決めきれなかつた…あとは竜二に任せんしかないか…』
「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

悠吾

L P 1 3 5 0

モンスター

H S R チャンバラライダー

A T K 2 4 0 0

S R ダブルヨーヨー

A T K 1 4 0 0

魔法・罠

伏せ1枚

「あとは俺に任せろ！ドロー！」

ゴースト1

SPC7→8

ゴースト2

SPC3→4

悠吾

SPC1→2

竜二

SPC7→8

「スタンバイフェイズ！罠発動、《シンクロ・ソニック》！俺のフイールドに存在するシンクロモンスターの数まで魔法、罠を破壊する！俺のフイールドには《チャンバラライダー》が1体…よつて装備カード状態の《ソウザ》を破壊する！」

悠吾が前のターンに伏せたトラップカードを即座に発動させる。破壊するのは機皇帝の力の源となつていて《XX-セイバー・ソウザ》だ。

機皇帝スキエル∞

ATK3900→1400

「《ソウザ》が…サンキュー、ユーホー！俺も《スピード・ワールド2》の効果を使う！SPCを7つ取り除きカードを一枚ドローする！」

竜二

SPC8→1

「…これなら…どうやら2人を一気に片付けられるぜ！」

「調子に乗るな！今SPCを引いたとしても貴様のSPCは1！効果ダメージは与えられない！」

「効果ダメージで終わらせるなんて野暮な幕引きはしないさ！俺も真っ正面から機皇帝をぶつ倒してやる！」

ゴースト2人のフイールドは弱った機皇帝、そしてもう1人はがら空きだ。【X-セイバー】の展開力を發揮出来れば竜二の言うとおりこのターンで2人まとめてライフを削り取ることも可能だろう。

「俺は《XX-セイバー・ボガーナイト》を召喚！」

XX-セイバー・ボガーナイト

ATK1900

再度召喚される【X—セイバー】デッキの要となるモンスター。

「効果により『XX—セイバー／レイジグラ』を特殊召喚！」

XX—セイバー／レイジグラ

D E F 1 0 0 0

新たにトカゲのようなモンスターが特殊召喚される。このモンスターは見た目に反し強力な効果を有している。

『レイジグラ』の効果で墓地の『XX—セイバー／フォルトロール』を手札に加える。そしてそのまま特殊召喚！』

XX—セイバー／フォルトロール

A T K 2 4 0 0

こうなるともう【X—セイバー】は止まらない。

『『フォルトロール』の効果で『エアベルン』を墓地から復活！』

X—セイバー／エアベルン

A T K 1 6 0 0

「出来るならシンクロモンスターでケリつけたかつたが：確実に勝たせてもらう！バトル！『エアベルン』で1人目のゴーストにダイレクトアタック！」

もうゴーストのフィールドには壁となるモンスターはない。その攻撃をモロに受ける。

「ぐおおおおおおお!!まさか私が負けるとは…」

ゴースト

L P 1 6 0 0 ↓ 0

ライフが0になると同時にゴーストのDホイールが煙をあげ速度を落とす。

「よし、1人は倒した！次はお前だ！『ボガーナイト』で『スキエル∞』を攻撃するが…」

『スキエルG』の効果で攻撃を無効にする！

「だろうな！その為にモンスターを並べたんだ！『フォルトロール』でもう一度『スキエル∞』を攻撃する！」

「発動するカードはない…まさかシグナーでもない一般人に我々が敗北するとは…」

フォルトロールの一振りが『機皇帝スキエル∞』を真つ二つに両断する。それと同時に周りのパーティも碎け散りゴーストのDホイールが煙を上げて爆発する。

ゴースト2

L P 5 0 0 ↓ 0

「やべえ！ 爆発したぞ！」

「おいおい……大丈夫かアンタ！」

いくらいきなり襲つてきた不審者といえども目の前で木つ端微塵になられては夢見が悪い。Dホイールから降りてゴーストのもとへ駆け寄るがその姿を見て2人は凍りついた。

「マジかよ……」

「こいつ、ロボットだつたのか……」

とれかけたゴーストの腕から見えていたのは機械の配線のようなものでありその体からもバチバチと火花が飛んでいた。

「ユーゴー！ こっちのゴーストもロボットだぞ！ こいつら一体なんなんだ……」

竜二がもう1人のゴーストの方を確認するとそのゴーストも壊れかけており完全に機能を停止させている。

「こいつらの正体は分からねえけど……とりあえずこれでDホイーラー狩りは終わりそうだな。」

「つてことは一先ず一件落着つてことか？ はあー……なんか一気に気が抜けてきた……」

まるで緊張の糸が切れたかのようにその場にへなへなと座り込む竜二。悠吾もデュエルで受けたダメージが蓄積されたのか急に疲れが襲つてくる。

「そうだな……俺ももう限界だ…… あとはセキュリティに任せるとか」

携帯端末を取り出しセキュリティに連絡する悠吾。しかしその陰で停止したと思われたゴーストが再び起動し先程までとはまるで違う機械的な音声をだす。

「ギツ……ホ、ホウコ……ク……し、ぐ……なー、イガイ……ニ、モ……キヨウイ……ナ、ル……ソンザイ……ア……リ……」

それだけ言い残すと今度こそ完全にその機能を停止する。この世界で何が起きているかは分からぬ。しかし確實にネオドミノシステムに一筋の不安が差し込まれたのだった。

第7話

「俺はレベル4の『ダブルヨーヨー』にレベル3の『三つ目のダイス』をチューニング！その美しくも雄々しき翼翻し、光の速さで敵を討て！シンクロ召喚！『クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン』！」

悠吾のデッキの象徴である白竜が召喚される。このドラゴンは何度も悠吾の危機を救つてきた相棒的存在である。

「どうだ！これが俺のエースモンスターだ！」

「ククク…シンクロモンスターをだしたな？『機皇帝ワイゼル∞』よ！『クリアウイニング・シンクロ・ドラゴン』を吸収しろ！」

機皇帝から伸びてきた触手が『クリアウイニング』を捕らえその核へと吸収してしまう。

「そんな…『クリアウイニング』が…」

「シンクロモンスターを使う以上私に勝つ術などない！『機皇帝ワイゼル∞』よ！神代悠吾にダイレクトアタック！」

「あ…うわああああああああ！！！」

次の瞬間目を開けるとそこは見慣れた部屋の天井だつた。そして部屋の中に鳴り響くのは聞きなれた携帯電話のアラーム音だつた。
「なんだ…夢かよ…死ぬかと思った。」

まずは今のゴーストとのデュエルが夢であつたことに安堵するがそれと同時にあのデュエルの光景が鮮明に蘇る。未知の機皇帝というモンスター、そしてシンクロモンスターを吸収するシンクロキラー効果。デュエルから数日経つていても関わらずその記憶は薄れるどころか日に日に強くなりこのような夢まで見る始末だ。

『結局あいつらは何者だつたんだ…』

ベッドから体を起こしてデュエルアカデミアに行くために制服に着替える。この生活にも大分慣れただ。

デュエルが終了した後セキュリティがゴーストの体を解析したが、データは全て消去されていたらしい。誰がどのような目的でDホイーラーを襲っていたのか、何も分からなかつたようだ。

『あのデュエル、正直俺は足手まといでしかなかつた…竜二がいな

かつたら危なかつたな…それにもう1つ気になることが…』

もしももう1度ゴーストとデュエルして勝つことが出来るのか、そう聞かれれば答えはNOだ。自分はこの時代よりカードパワーの強いカードを持っている。だから負けることはないだろうと考えていたがそれは大きな間違いだった。それは悠吾にとつて自信をへし折られる気持ちだつた。

もう1つ気になることは彼の前世の記憶についてだ。本来彼はこの世界のことについて熟知しておりゴーストがシンクロキラーの効果を持つていてことを知っていたはずだつたのだ。しかしデュエル中、そのことを思い出すことはできなかつた。しかもそれだけではなく彼が前世で過ごしてきた全ての記憶が日々消えていき代わりに神代悠吾としてネオドミノシティで生きてきた記憶に書き換えられていつた。

「はあ…俺もすっかりこつちの世界の住人でことか…」

そのうち自分が憑依してこの世界に来たという事実すら忘れてしまふのではないか、そんなことを考えながら今日もデュエルアカデミアに向かう。

「おい見ろよ、あいつ神代悠吾だ。」

「学年トップクラスのツアンに勝つただけじゃなくてDホイーラー狩りまで倒すなんて何があつたんだよ。」

アカデミアの中を歩いているとそのような噂話が嫌でも入つてくる。ツアンとのデュエルに勝ったときもそうだつたので特に気にならなかつたが今回は以前よりよく耳に入る。

確かにいつもはあまり目立たなかつた生徒がこうも立て続けに勝ち続ければおかしいと思われても仕方がない。自分が注目されるのは最初は気持ちのよいものだつたが今回は尾ひれがついてるだけに複雑な気持ちだ。

「よおー、ユーゴー！相変わらず今日も噂になつてんな！」

「茶化すなよ…それにツアンとの試合は兎も角ゴーストとのデュエルはお前にかなり助けられたのに俺一人で勝つたみたいになつてるし」
「確かに噂が事実以上に一人歩きしてるとこあるな。まあ人の噂もな

んどやらだし1週間もしたら飽きるんじゃねえの？」

「つたく…たまつたもんじゃねーな」

そう悪態をつく悠吾。竜二の言うとおりそのうち生徒達も飽きるとは思うが力不足で悩んでいるというのに必要以上に噂されるというは何か気分が悪い。

「なんか今日機嫌ワリーやん。気晴らしに今日の放課後ライデイングデュエルでもどうよ？Dホイールもそろそろ修理終わつただろ。」「あーゴメン、俺今日バイト行かねーとダメなんだ。」

「あれ？お前バイトやつてたっけ？」

「まあ色々物いりなんだよ俺も…」

以前まで悠吾はバイトをしていなかつたがゴーストとのデュエルで破損したDホイールの修理費、また生活費を稼ぐためには両親の仕送りだけでは心許なかつた。

「へえー、お前がバイトねえ…因みにどんなバイト始めたんだ？」

「なんだよその意味深な返しは…トップス地域の清掃員だよ。」

「プツ…こりやまた渋いバイト選んだな！お前だつたらてつきりデュエル関係のバイトすると思つたのに。」

余程意外だつたのか悠吾の答えに吹き出した竜二。確かに清掃員のアルバイトはアカデミアの生徒が進んですることはない。大抵デュエル関連のアルバイトをする生徒がほとんどだ。

「笑うなつつの。まあ俺もできるならそつちの方が良かつたけど時給が1番高かつたし。背に腹は変えられないってことだ。」

トップス地域ということだけあつて時給は普通の地域より高い。しかも普段あまり立ち入ることができるないトップス区画を見て回れるのもいい機会だと考えこのバイトに決めた。

「なるほどなー、じゃあ今日はカードショッピングでも行くか。バイト頑張れよ」

「おう、ガツツリ稼いでくるわ」

実は少しデュエルから距離をおこうと考えていた。ゴーストとの1件がありデュエル自体に恐怖を抱いたからだ。デュエルに関係のないアルバイトを選んだのもその考えがあつたためだつた。

『デュエルは楽しいもんだと思つてたのに…あんな生き死に決めるデュエルは流石にもう嫌だな。』

「どーした? ユーゴ、腹でも痛いのか?」

辛辣な顔をしていたのか、竜二が悠吾を見て不思議そうに聞く。

「いや、ちょっとと考え事してただけだ。」

「そつか、それならいんだけどよ…最近よくそんな顔して考え込んでるけど悩みでもあんのか? 相談のるぜ?」

自分はそんなにいつも気難しい顔をしているのか、気を付けようとと思うと同時にこの悩みを共有できる仲間がないのは心苦しい。竜二は親友だがこんな突拍子もない話をいきなりするわけにはいかない。いつか話せる日が来ればいい、そんなことを考えていたら始業を知らせるチャイムが鳴った。

* * * * *

昼休憩、それは学生にとつて長い授業時間の中でオアシスとも言える時間だ。デュエルアカデミアでも今まさに昼休憩が始まり学生たちが羽を伸ばしていた。

「ユーロ、学食行くぞお!」

授業中はほとんど寝ている癖に昼休憩になつた瞬間、飛び起きている。

「ハイハイ、俺トイレ行つてくるから先に席とつといてくんね?」「おつけ。混むから早くこいよ!」

そう言うや否や一目散に教室から出ていつてしまつた。自分もさつさとやることを済ませて学食に行こうと席を立ち教室を出ようとするとその行く手を阻むようにある人影が立ちふさがる。

「神代君、ちよつといい?」

そう声を掛けた來た人物には見覚えがあつた。赤い髪、特徴的な髪飾りに目のやり場に困る大きな胸。遊戯王5D, Sのヒロインである十六夜アキその人であった。

一方話しかけられた悠吾は内心テンパつていた。

『ツ…アキじゃん! まさか原作キャラが向こうから話しかけに来てくれるなんてな…何の話だ…?』

自分の記憶から察するにアキと個人的に接したことはない。つまり悠吾がこの世界にきてからの行動について何か聞きたいことがあると考えられる。

「えつと…神代君？」

内心いろいろ考えて上の空だつた悠吾が気になつたのかアキが不思議そうな顔をする。

「…ああ！うんうん、大丈夫大丈夫！んでなんだつけ？」

「ここじやなんだから別の場所で話さない？」

「ああ…行こうか。」

場所を移して話すということは他人に聞かれたくない内容を少なからず含んでいるということだ。思わず肩に力が入る悠吾。

『女の子に呼び出されるのはなんかワクワクするけど絶対そんな色っぽい話じやねーよな…まあ大方何の話か予想できるけどな』

人気のないアカデミアの校舎裏に到着する。昼休みとはいえど、この場所に近づく生徒はそういない。

「呼び出してごめんなさい…けどどうしても聞いておきたいことがあつて…」

「大丈夫だよ。ところで聞きたいことつてもしかしてゴーストについて？」

「ええ…それと神代君の持つてるドラゴン、『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』について聞きたいの。」

そう言つてアキは自分の制服の袖をめくる。そこにはドラゴンの爪のような痣そして自身の『デッキから1枚のカード『ブラック・ローズ・ドラゴン』を取り出し悠吾に見せる。

「その痣は？ケガつて訳じやなさそうだけど…」

「これはシグナーといつて5000年周期でダークシグナーと戦う者達に刻まれる赤き竜の体に一部を模した痣なの。そしてこれがシグナーの竜の1枚である『ブラック・ローズ・ドラゴン』よ」

「なんか途方もない話だな…でもそれと俺の『クリアウイング』と何か関係があるのか？」

「ええ。貴方が初めて授業でそのドラゴンを召喚した時私も見てたの

だけど、確かに私たちの持つているシグナーの竜と同じ気配を感じたの。だからそのカードをどうやって手に入れたかを教えてもらえない？」

初めて召喚した時は確かツアンとのデュエルのときだ。あのデュエルをアキも見ていたのだろう。しかし困ったことになった。まさか交通事故にあつて目が覚めたら別人になつていてその時に『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』を手にいれたと言つても信じてもらえないだろう。

シグナーやダークシグナーの存在も十分オカルト染みているがそれ以上に自分の境遇も現実離れしている。

「このカードは…そうだな…ある人にもらつたんだ。それに確かにこのカードは特別だけど十六夜さんの言うシグナーとは関係ないと思う。俺の腕にはそんな痣もないしね。」

そう言つて己の制服をまくり腕を見せるが確かに腕に痣はない。それを見たアキは多少残念そうな表情をするが新たな提案を持ち出す。

「そう…なら、私達のチームと一緒にゴースト、その裏で手を引いていいるイリアステルと戦うために力を貸してくれないかしら？ 神代君ならデュエルの腕も立つし、どうかな？」

「あー…お誘いは嬉しいんだけど俺は力になれないや…あんな命懸けのデュエルはもう懲り懲りなんだ」

「…分かつたわ、ありがとう。時間を取らせてしまつてごめんなさい」「いや、こつちこそ力になれなくてゴメン。」

チームに誘われたこと、自分の力を見込んでくれたことは素直に嬉しかつたが今の自分では足手まといにしかならないだろう。それに面倒事にこれ以上首を突つ込みたくない、そんな本音があつた。

そう考えながら竜二の待つ学食へ向かった。

「ユーホ、遅いって！ どんだけ長いウンコしてんだよ！」

「ちつげえよ！ しかもデカい声でなんこと言つてんじやねー一つーの！」

デリカシーなく大声で悠吾を呼ぶ竜二。やれやれと思いつつ竜二

の横に座り食事を口に運ぶ。先程のアキの落ち込んだ表情が脳裏に浮かぶが頭をボリボリかいてそれを必死で振り払う。後ろめたさは多少あつたが後悔はしていなかつた。それほどに悠吾にとつてゴーストとのデュエルは恐怖でしかなかつた。

『ハア……俺に出来ることはない、ないんだ！』

そうやつて自分に何度も言い聞かせて食堂を後にする。

* * * * *

今日1日の授業がすべて終わり終業のチャイムがなり響く。悠吾は帰り支度を済ませると教室を出て廊下に出る。竜二は教室でまだ駄弁つてゐるが悠吾はバイトの予定が入つてゐるので久しぶりに1人で下校する。

「神代、悠吾さんですか？？」

廊下を歩いている悠吾に後ろから声をかけられる。振り替えるとそこには肩にまで伸びたウエーブのかかつた髪、身長は悠吾より10センチほど低い女子の中ではそれなりに大きな部類に入る身長、そして何よりも目につくのはアキに負けず劣らずの豊満な胸だ。

『何でこの世界の女はどういつもデカパイなんだよ!?』

「そうだけど何？」

心のなかではそんな風にシャウトしていたが表面的には極めて冷静に対応する。それにしても今日はよく呼びとめられる日だ。まあ2人共美人なので男の悠吾からしたら悪い気分はしない。

「少し話がしたいと思つただけですよ。申し遅れました北条エリと申します。」

「北条…？」

その名字には聞き覚えがあつた。確か竜二との雑談の中で聞いたことがある。北条グループと言えば有名な財閥でそこの令嬢らしい。つまり超お嬢様ということだ。思えば雰囲気や話し方からも育ちの良さがにじみ出ている。

「話ねえ：あんまり時間ねーから手短に頼むわ」

「あらあら、つれないですね。では手つ取り早くデュエルでもどうですか？」

「何でそうなるんだよ…」

この後予定もあつたためさつさと終わらせたいと考え、突き放した返事をしたつもりだったが相手は全く動じた様子がない。お嬢様だと考え、打たれ弱いと思ったが案外図太い神経をしているようだ。

「あなたの噂は聞いています。学年トップのツアンさんに勝利し、その上ゴーストまで退けたらしいですね。それにとても面白いドラゴンをお持ちとか：私もデュエリストの端くれとして一度手合わせしたいと思つただけですよ。」

どうやらエリの目的は悠吾で腕試しをしたいということらしい。確かにエリは幼い頃から数々のジュニア大会で優勝や入賞を果たしている実力者という話も聞いたことがある。それならば悠吾に興味を持つても不思議ではない。

「デュエルなら尚更ダメだ。この後予定あるし今そんな気分じゃねーんだ。」

「む…それならしようがないですね。また後日お願ひさせてもらいます。」

「…いきなり声をかけてきたわりには直ぐに引き下がるんだな」「私はそんなに無礼者に見えましたか？心外ですねえ」

傷ついたという風な仕草をするがその声色から察するに全くそんな様子はない。いきなりデュエルを申し込んで來るところといい、飄々とした態度といい、何を考えているのか分からない。

「まあそのうち機会があればこっちからお願ひさせてもらうよ。じや、俺は予定あるから」

適当な社交辞令を言つてくるりと背を向け歩きだす。その背中にエリも声をかける。

「ええ、それではごきげんよう。……また直ぐに会えると思いますが」お嬢様らしい挨拶を述べるがその後の台詞は悠吾にも聞きとれない小さな声でありその言葉を聞いたのはエリ只一人だけであつた。

第8話

「じゃあ神代君、今日はこの地域の清掃をお願いね。」

「ういーす、了解です。」

場所は変わり、悠吾は今アルバイト先の事務所に来ていた。トップス地域の清掃と1言と言つても1人で全域を掃除するわけではない。担当する職員が区画毎に決められている。今回悠吾が担当するのはある公園のようだ。

事務所からだと修理が終わつたDホールに乗りトップスを目指す。

『やっぱトップスってすげえ…ネオドミノシティ全体が近未来て感じだけどここは特にその色が強いし何より大きい建物が多いな』

そしてその警備も強固なものだつた。トップス区画に入るだけでセキュリティが駐在するゲートを通らなければならぬ。

『えーっと…指定された住所はここだな。うおつ…でつけえ公園だな、見た感じは綺麗だけど意外にゴミとか汚れてるところあるつてたつつけ』

事務所から支給された掃除道具を手に早速掃除に取りかかる悠吾。確かに見えないところにゴミが結構落ちている。外側からみると分からぬことがあるものだ、そんなことを考えながら手を動かす。

ゴミ掃除のバイトなど前の世界にいたときもやつたことがなかつたので少々不安であつたが、作業中誰とも喋れず少し寂しく感じる以外は順調に進んでいった。案外自分はこのバイトが向いているのかもしれないとすら思つた。

あらかた作業を終え、あとは出たゴミを片付けて帰るだけ、となつたとき公園の前に如何にもお金持ちが乗つていそうな大きなリムジンが停まる。トップスにいるのだからリムジン自体は珍しくないが、ドアが空き中から見知つた顔の人物が出てくる。

「アルバイトお疲れ様です。それにしても奇遇ですね。こんなに早くまた会えるとは」

ニコニコと胡散臭い笑顔を浮かべてリムジンから出てきたのはな

んと北条エリだつた。それを見て悠吾は啞然として固まる。

「な…なんでここにいるんだよ!?まさか…後つけてきたんじゃねーだろな!?

「私がそんなストーカー紛いの真似をすると思しますか?家がこの近くでたまたま通りかかっただけですよ。」

確かにエリの実家がこの近くだということは嘘ではないだろうしそんな偶然もあるかもしれない。しかし悠吾の今までのエリに対する印象からするとその言葉を素直には受け入れられなかつた。

「あ。そー…んで、何の用?見ての通り俺バイト中なんだけど」

「そうなのですか?確かにそろそろシフトの時間が終わると聞いたのですが」

「そ、うなんだけど……ってなんで俺のバイトのシフト時間知つてんだよ!?

「まあ、細かいことはいいじゃないですか。」

手元の手帳を見ていたかと思うとそれをパタンと閉じて笑顔で答える。今まで生きてきてこれほど人の笑顔が怖いと思つたことはない。校内ではお嬢様で誰に対しても平等に接する人格者という噂を聞いたのだが猫を被つてゐるようだ。

『マジでこの人は敵に回したらいけない人だ……!!』

つい最近決まつたバイトの情報を知つてゐるとは思いもしなかつた。これが権力の力といつたところか。エリの持つてゐる手帳にどれだけの人間の情報が載つてゐるのか考えただけでも恐ろしい。

「ん?今何か失礼のことを考えていませんでしたか?」

「い、いや…何でもない。」

下手なことを言つたら何をされるか分かつたものではない。ここは黙つておこうと口を紡ぐ悠吾。

「まあいいでしよう、それよりこれからデュエルで対決といきませんか?」

「いきなり來たと思えばデュエルかよ…お嬢様つつてもワガママは大概にした方がいいぜ。」

自分に用事があるとしたら放課後デュエルを挑まれた件以外に思

い付かない。しかし悠吾はバイトで疲れていた上に気が進まなかつた。

「つまり断るということですか？」

「そういうことだ。ワリーけどこれで俺は帰らせてもらうわ。」

そう言うとくるりと背を向けて公園から出ていこうとする。それを見るとエリはやれやれといった表情をし、再び手帳を開く。

「神代悠吾君、年齢 17 歳、出身地はネオドミニシティ。成績は中の上ですが、最近急にデュエルの腕が急激に上がったとか…好きな女性のタイプは年上キツめでしっかり者…成る程、見かけによらずドMなんですねえ。」

「ちよ、ちよつと待つてやコラア！」

猛スピードで振り替えるとこれまた目にも止まらぬ早さでエリに詰め寄る。

「年齢とか住所は兎も角なんでそんなことまで知つてんだ！」

「あら？ 違いましたか？」

「いや…確かにあつてる…：じやなくて！ どつからそんな情報仕入れてきてんだよ！」

「それら企業秘密というやつです。しかし困りましたね、デュエルを受けてもらえないとなるとうつかり口が滑つて全校生徒の前であらぬことを喋つてしまふかも…」

『こ、この女…』

どうやらあの手帳には個人情報以外にも他人に知られたくないような恥ずかしいことまで記されているようだ。いよいよ本格的に恐怖を感じるが、ここで歯向かうと何をされるか分かつたものではない。喉まで出かかった悪態をぐつとこらえる。

「わ、分かつたよ。デュエルすりやあいいんだろ！」

「快く受けて頂いて何よりです。」

そう言つてペコリと頭を下げるが脅されているようなものだ。気は進まないがこうなつた以上デュエルを受けないわけにはいかないだろう。

「やるならさっさと始めようぜ」

Dホイールに内臓されているデュエルディスクを取り外し腕にセットする。それを見たエリも鞄からデュエルディスクを取り出し構える。その表情は先程の柔らかい笑顔ではなく、まるで獲物を前にした肉食獣のような目をしている。

『北条エリ、か…雰囲気から察するに間違いなく実力者だ。《クリアウイング》、今回も頼りにしてるぞ』

ツアン戦の時のように心のなかで《クリアウイング》に声をかけて願掛けをする。しかし前回と違い白竜が悠吾の呼び掛けに答えることはなかつた。

『《クリアウイング》……?』

「さあ、始めましょう！デュエル!!」

「デュ、デュエル!!」

エリ

L P 4 0 0 0

悠吾

L P 4 0 0 0

若干違和感を覚えつつもデュエルをスタートさせる。懸念はあるが今は目の前の相手に集中すべきだろう。

「私の先攻ですね、ドローー！」

その華奢な見た目とは裏腹に勢いよくカードをドローする。エリのデッキ内容が分からぬ為、油断は禁物だ。下手をすれば先攻1ターン目で大量のモンスターを展開され、手をつけられなくなってしまうだろう。

「あまりいい手札ではないですね、まずは手札交換といきましようか。魔法カード《天空の宝札》を発動します。手札の《光神機一轟龍》を除外してカードを2枚ドローします。」

素早く手札交換をするエリ。除外した《光神機一轟龍》は強力なモンスターだが高レベルな為手札では腐ると判断したのだろう。そして直ぐにドローしたカードを発動させる。

「さて、下準備といきましょうか。《神秘の代行者アース》を通常召喚！」

神秘の代行者アース

ATK1000

先程の『轟龍』と同じ天使族モンスター。男性なのか女性なのか分からぬ中性的な見た目をしている。これまででプレイしたカードの枚数は3枚だがどのようなデッキかを特定するには十分だった。

【代行天使】か：こりやまた厄介なデッキだな

「正解です。では『アース』の効果でデッキから『創造の代行者ヴィーナス』を手札に加えます。もう少し展開したいですが：『天空の宝札』の効果で特殊召喚はできませんのでカードを1枚伏せてターンエンドです。」

エリ

LP4000

モンスター

神秘の代行者アース

ATK1000

魔法・罠

伏せ1枚

「俺のターンドロー、さてどうするかな…」

エリのフィールドには『アース』が攻撃表示で棒立ちしており戦闘破壊は容易だが、伏せカードも気になる上にコンバットトリックの可能性もある。

悠吾の手札も良いとは言えないうえに手札交換カードもない。

『この手札じゃシンクロ召喚はムリだな…墓地も肥えてないし手堅くいくか』

「俺は『SRパチンゴーカート』を召喚！」

SRパチンゴーカート

ATK1800

『SR』ですか：聞いたことのないテーマですがおもちゃをモチーフにしていて可愛いですね

「見た目で判断しない方がいいぜ！『パチンゴーカート』の効果発動！手札から機会族の『SR電々太鼓』を捨てて『アース』を破壊！」

キリキリと音をたて、《パチンゴーカート》が《アース》に狙いを定めると勢いよく弾を発射する。そのまま着弾しアースは破壊される。

『伏せカードは発動なし…か。』

「バトル！《パチンゴーカート》でダイレクトアタック！」

「攻撃宣言時、永続罠、《奇跡の降臨》を発動して除外されている《轟龍》を特殊召喚します。」

光神機一轟龍

ATK2900

除外されていた《轟龍》を直ぐに呼び戻す。恐らくこの展開も考えて先程除外したのだろう。

「2900…！攻撃はやめてメイン2にはいる。カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

悠吾

LP4000

モンスター

SRパチンゴーカート

ATK1800

魔法・罠

伏せ2枚

「私のターン、ドロー。さて、そろそろ本氣で行きましょーか。」

明らかにまとう雰囲気が変わる。手札は5枚、打てる手はいくらでもある。

「《創造の代行者ヴィーナス》を通常召喚して効果を発動します！何かありますか？」

「いや…発動するカードはない」

やはりと言うべきか、前のターンにサーチした《ヴィーナス》を召喚し、効果を発動させる。出来るなら止めたいが、その術は悠吾にない。

「ではライフを1500支払いデッキから《神聖なる球体》を3体特殊召喚します。」

エリ

L P 4 0 0 0 → 2 5 0 0

神聖なる球体×3

D E F 5 0 0

ライフポイントを削つてしまふがデッキからモンスターを直接リクルートできるのは強力だ。あつという間にエリのフィールドがモンスターで埋め尽くされる。

「ワラワラ出てきやがつて…まるであいつらみてーだな。」

1ターンで複数体を並べるのはゴーストが使用する機皇帝を彷彿とさせる。

「普通は低攻撃力だとバカにする人が多いのですが貴方は違うようですね。ではもうひと押し、『神聖なる球体』を除外することでチューナーモンスター、『異次元の精霊』を特殊召喚します。」

異次元の精霊

A T K 0

「チューナーにそれ以外のモンスター、くるか：」

「私はレベル2の『神聖なる球体』2体とレベル3の『ヴィーナス』にレベル1の『異次元の精霊』をチューニング！」

4体にもよるシンクロ召喚、合計レベルは8

「大いなる閃光、星々の輝きを束ね断罪の剣閃となせ。シンクロ召喚！力を貸してください！『神聖騎士パーシアス』！」

神聖騎士パーシアス

A T K 2 6 0 0

「オイオイ、手加減無しだな」

「ええ。貴方には全力でお相手させていただきます。私のエースモンスターもご覧に入れましよう。

墓地の『創造の代行者ヴィーナス』を除外しモンスターを特殊召喚します。』

「この召喚条件…代行天使のリーダーのおでましか」

天空から光が降り注ぐ。

「天空に住まいし、太陽神よ。矛向ける敵を焼き払え！来てください、『マスター・ヒュペリオン』！」

マスター・ヒュペリオン

ATK2700

これでエリのフィールドには上級天使が3体。その1体1体が高い攻撃力と強力な効果を備えている。

「流石にやるな、一気にケリつける気か?」

「そうですね、ですがその前に邪魔な伏せカードを除去させてもらいます。『マスター・ヒュペリオン』の効果! 墓地の『ヴィーナス』を除外して伏せカードを破壊します。」

破壊されたカードは『聖なるバリアー・ミラーフォース』ドンピシャで攻撃反応型トラップを撃ち抜く。

『ミラフオ』が…!』

『ミラーフォース』ですか、物騒な罠をしかけていたようですがこれで安心ですね。バトル! 『パーシアス』で『パチンゴーカート』を攻撃! そして効果を発動します!』

『パチンゴーカート』が防御の姿勢を取り、守りにはいる。

S R パチンゴーカート

D E F 1 0 0 0

「なるほど、表示形式変更効果か…でもそれじゃあ戦闘ダメージは与えられねーぞ?」

「焦らないでください。『パーシアス』は貫通効果を持っています」

表示形式を変更できるうえに貫通効果を持つていているということは攻撃力、守備力が2600未満のモンスターを戦闘破壊した上でダメージも与えられる。中々に優秀な効果を持っている。

悠吾

L P 4 0 0 0 → 2 4 0 0

勿論『パチンゴーカート』の守備力が届く訳もなく呆気なく破壊されてしまう。しかしそうエリには天使2体の攻撃が残っている。

「これで終わりですか? 『マスター・ヒュペリオン』でダイレクトアタック!」

『マスター・ヒュペリオン』が発した炎が悠吾に襲いかかる。

「クツソ…! 罰発動、『ピンポイント・ガード』! 墓地から『パチンゴー

カート》を蘇生し、このターン如何なる方法でも破壊されない！」

「まだ踊れるようですね。《轟龍》で《パチンゴーカート》を攻撃！《轟龍》も《パーシアス》と同じ貫通効果を持つていますよ。」

「んだと!? ぐうう……！」

悠吾

L P 2 4 0 0 → 5 0 0

あつという間にライフポイントが500まで追い込まれる。これがライディングデュエルだつたらデッドラインを越えていて危ないところだつた。

『畜生……ライフが尽きねえように立ち回るので精一杯だ』
「私はこれでターンエンドです。そろそろ例のドラゴンを見せていただけますか？』

エリ

L P 2 5 0 0

モンスター

マスター・ヒュペリオン

A T K 2 7 0 0

神聖騎士パーシアス

A T K 2 6 0 0

光神機一轟龍

A T K 2 9 0 0

魔法・罠

奇跡の降臨

「俺のターンドロー……どうやらお望み通りあいつを呼べるみたいだぜ」

ドローしたカードを見てニヤリと笑う悠吾

『今引いたのは《三つ目のダイス》。こいつと《パチンゴーカート》で《クリアウイング》を呼べる……！』

「俺は《S R三つ目のダイス》を通常召喚！そしてレベル4の《パチンゴーカート》にレベル3の《三つ目のダイス》をチューニング！」

レベル合計は7。呼び出すシンクロモンスターは勿論決まつてい

る。

「その美しくも雄々しき翼翻し、光の早さで敵を討て、シンクロ召喚！
『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』！」

エクストラデッキに手を伸ばし当然のようにそのモンスターを召喚しようとするが、一向に召喚時のエフェクトが起こらない。

「え……？ どういうことだ!? オイ、『クリアウイング』！ 何で召喚できねえんだよ！」

何度もディスクに反応させようとするが『クリアウイング』がそのまま呼び掛けに答えることはなかつた。

『こんな時にディスクの故障か!? 他にレベル7のシンクロモンスターはいないつてのに』

「どうしました？ シンクロ召喚はしないのですか？」
「クソッ…俺はこのままターンエンドだ…」

シンクロ召喚は出来ない上にこれ以上モンスターを展開することもかなわない。手札をみたが、伏せカードで逆転も難しそうだ。例えブラフで伏せたとしてもエリは躊躇しないだろう。

悠吾

LP500

モンスター

SRパチンゴーカート

DEF1000

SR三つ目のダイス

ATK3000

魔法・罠

無し

「私のターンドロー…聞いていた話と随分違いますね」

エリのターンとなりゆつくりと自分のデッキからカードを引く。そして少し期待はずれと言つた表情をしていた。

「どういう意味だよ？」

「もつと歯応えのあるデュエルを期待していたのですが…さつきターンの立ち回りといい、正直期待外れですね。」

散々な言われようだが確かに悠吾も思い当たる節がある。ゴーストとのデュエル以降どうしても気持ちが半歩下がってしまう。クリアウイングを召喚できなかつたのもこのことが原因かもしれない。そう思い何も言い返せずに項垂れてしまう。

「……残念です。興が冷めました。悪いですがデュエルはここまでとさせてもらいます。」

「な、何!?」

そういうとエリはデュエルディスクの電源を落とす。それと同時にモンスターも消える。しかし悠吾はそのエリの行動に納得しないようだ。

「なんでデュエルを…」

早々に立ち去ろうとするエリの背中に向かつて悠吾が叫ぶとエリは立ち止まり振り返ると冷たくいい放つ。

「先程も言つた通り今のあなたに戦意を感じません。何があつたかは知りませんが心に迷いがあるようですね。無理矢理誘つてしまいますがいませんでした。また機会があればお手合させ願います。」「ああ…そとかよ…」

迷いがあるという図星をつかれてしまつてこう言い返すのが精一杯だつた。確かに無理矢理誘われたという形とはいえ、デュエルになつた以上は本氣で相手をしようと考えていた。しかし実際にデュエルをして、思つていた以上に自分は上の空だつたようだ。そのせいかクリアウイングも呼びかけには答えてくれない。

『どうすりやいいんだよ…』

大好きだつたデュエルがゴーストとの一件以来『恐怖』を感じる対象へと変わつてしまつた。そのせいで満足にデュエルを出来なくなつてしまつた。どうすれば解決できるか考えたところで何も思いつかなかつた。

エリが去つた後もしばらくその場に立ち尽くしているとポツポツと雨が降り始めた。空を見上げると先程までの快晴とはうつて変わつて曇天の空が広がつていた。

まるでそれは悠吾の心を表しているかのようだつた。

第9話

「これで終わりだ！『ナチュル・ガオドレイク』でダイレクトアタック！」

「ツ…ライフで受ける…」

悠吾

LP700→0

エリとのデュエルから数日経ったが、未だに悠吾は『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』を召喚できずにいた。理由は分からぬうちに授業でもデュエルの勝率はどんどん下がつていった。

カードゲームである以上運が絡むためずつと勝ち続けることは容易ではないが悠吾の場合は今回のデュエルのように一方的に負けることが多くなっていた。

「やつた～！神代悠吾に余裕勝ちしたぜ！もしかしたら俺アカデミア最強？」

「アホ、あんなんだつたら俺でも勝てたわ。全然シンクロもしないし防御だつてお粗末すぎんだろ」

先程対戦した生徒とその友人であろう生徒の話し声が聞こえる。散々な言われようだ。普段なら聞き流しているが今は状況が状況だけに心に深く突き刺さる。

悠吾としてもあのような無様なデュエルなどしたくはなかつた。しかしエリとの試合以来、『クリアウイング』だけではなく、デッキ全体がまるで今までとは違うデッキかと思うほど回らなくなつていた。具体的に言うと手札事故が極端に多くなつており、先程のデュエルのように手も足も出ないことが多かつた。

「悠吾！デュエル終わつたのか？」

ギリっと歯軋りをしたところで話しかけられる。竜二だ。どうやら彼も対戦相手とのデュエルを丁度終えたようだ。対戦していくと思われるフィールドを見ると快勝したようだ。

「ああ…まあ見ての通りボロ負けだけどな…」

フツ…と自嘲気味に鼻で笑う。自分とは対照的に勝利している竜

二になんて言つていいのか分からずこう返す他なかった。

「おお…そうか…」

また竜二も、そんな悠吾を見て言葉を濁す。最近、特にゴーストとのユエル後悠吾の様子がおかしいことには気付いていたがなんと声をかけていいか分からなかつた。というのも以前と人が変わつてしまつたかのように無気力になつてしまつたからだ。

「彼に何を言つても無意味だろう。

「やあ俺教室戻るわ」

どうしたものかと考え込んでいると悠吾は足早に教室に戻つてしまつた。その背中は酷く寂しそうだつた。

その背中を見て歯痒く思いながら竜二はある決意をする。

「悠吾…」

放課後になり、下校時刻となる。生徒たちは部活をしたり友人と遊んだりと思い思いの時間を過ごす。悠吾も帰り支度を済ませて席を立つ。

『今日はバイトないから帰つて寝るか…』

つもならDホイールでも転がして野良ライディングデュエルか、カドショツプでスタンディングデュエルをしているところだが最近ぬめつきり辞めてしまつた。

帰ろうとした悠吾だが後ろから呼び止められる。

「や！ ゴー！ ちよつとまで！」

振り向くと声の主は竜二だつた。そういうえば最近まともに話していない。今日も授業後に話した気がするが上の空で何を話したかよく覚えていない。

「どうした…？俺今から帰るんだけど」

「俺と勝負しろ！」

「は…？」

いきなりの申し出に思わず間抜けな声が出てしまう。少年漫画ではよくありがちな光景だがまさか自分が言われるとは思わなかつた。最近デッキを新しくしたからな。アカデミアトップクラスのお前に

「どれだけつうじるか試してーんだ。」

確か竜二の使用していたデツキは『X—セイバー』だ。こちらの世界に来てから日が浅いのですぐにデツキを変更したように思えたが竜二はこのデツキを長く使っていだはずだ。愛着のあるデツキを何故変えたのかはとても気になるところだ。

「まさかお前が『X—セイバー』のデツキから乗り換えるとはね。」

『X—セイバー』は『借り物』のデツキだからな。俺も自分のテーマで戦つてみたくなつただけだよ。あともしかしたらまたゴーストと戦う機会があるかもしれないからな、俺なりの対ゴースト策を考えていたんだよ。」

「そうかよ。でも残念だけどその新デツキでの初デュエルは無理。」

「は!? なんでだよ? 今日バイトなくて暇だろ!」

バイトが無いからと言つて暇だと言われるのは心外だつた。もしかしたらプライベートの用事があると思つてくれてもいいものだ。今回は家に帰つて寝ようと思つていただけなので竜二の言う通り暇なのだが。

だから理由は他にある。

「お前も見たろ? 授業のデュエル。あんなお粗末なデュエルしかできないんだよ俺は。デツキの試運転は他の人に頼んで。」

「いや! 俺がお前とデュエルしたいんだ!」

「人の話を聞けよ? 兎に角無理、帰る。」

竜二はこちらの都合を全く聞いてくれない。悠吾としてもできるなら協力してあげたいが今の自分が付き合つても迷惑をかけるだけだろう。そう思つて回れ右をして帰ろうとした。

「逃げんのか?」

ガシツと悠吾の腕を掴む。引き止めるにはあまりにも稚拙な挑発だ。こんな見え見えの挑発にのるのは小学生ぐらいだろう。

「なんだつてんだよ…」

理由は分からないがここまで竜二が食い下がるのは珍しい。掴まれた腕を振り解こうとするが竜二はその手を離さない。こうなつたらテコでも動かないだろう。

「はあ…分かつたよ。ただし一戦だけだからな。」

「よし！じゃあDホイール乗つてアカデミアの練習用サーキット集合な」

「はい…」

「気は進まないが約束してしまった以上やるしかない。そう覚悟を決め約束の場所のサーキットに向かう。」

場所は変わりデュエルアカデミアのサーキット。テレビで見るよう大会のようなサーキットとまではいかないがそれでも十分な広さ。
悠吾達以外にもこの場所にライディングデュエルをしにきた生徒がちらほら見受けられる。

「来たかユーポ！」

重い足取りで竜二を探しているとDホイールのメンテナンスをしている竜二を見つける。

「サークット使える時間限られてるからな。早くスタートしようぜ。」
そう言うとすぐさまスタートラインにDホイールにつける。どうやらグチグチとゴネている暇は与えてくれないらしい。

「わーったよ。じゃあカウント始めてくれ。」

悠吾もスタートラインにつく。思えばライディングデュエルはコーストとの一件以来だ。体に緊張が走り、心拍数も上がる。
緊張で気づかなかつたが周りには生徒が集まつてきている。悠吾と竜二のデュエルを見に来たようだ

「ギャラリーも集まつてきたな！じゃあカウント開始だ！」

3、2：

久しぶりの感覚に若干戸惑いながらもアクセルに力を入れる。深呼吸して呼吸を整え、前を見る。今はこの瞬間に集中しなければならない。

1

「ライディングデュエル・アクセラレーション!!」

悠吾LP4000

竜二LP4000

開始のブザー、そして2人の掛け声とともにライディングデュエルが始まる。勢いよくアクセルを踏み一気に加速する。久しぶりだつたがスタートダッシュは上手くいった。

『よし！このまま第一コーナー先取だ！』

「させるかよ！」

だがそう簡単には行かせてくれず、竜二もアクセル全開で追随する。

両者一步も譲らず第一コーナーにさしかかったが、その直前に悠吾と竜二のDホイールが接触しそうになる。

「…やべ！」

一瞬悠吾の脳裏にコース戦での衝撃がフラツシユバツクする。その一瞬にアクセルを緩めてしまう。

「そこだ！」

その隙を竜二是見逃さなかつた。コースを目一杯使つて悠吾を追い抜かし第一コーナーを先取する。一瞬の氣の迷いで第一コーナーを譲つてしまつたが引きずつている余裕はない。

「第一コーナーは俺がもらつた！ドロー！」

竜二 S P C O → 1

悠吾 S P C O → 1

『竜二のやつ…デッキの枚数増やしたのか？』

体勢を立て直し竜二の出方を伺う。先程の話が本当なら彼のデッキは【X－セイバー】とは別物ということだ。情報がないため、どのような出方をしてくるため全く予想が出来ない。

『俺は、《カードガンナー》を通常召喚！』

カードガンナー

A T K 4 0 0

現れたのは目からライトを発するロボット。

『《カードガンナー》の効果発動！デッキの上からカードを3枚墓地に送る。』

デッキトップからカードが3枚墓地に送られる。墓地肥やしとして優秀な効果と言えるだろう。

「墓地に送ったカード1枚につき『カードガンナー』の攻撃力は500アップする。つまり『カードガンナー』の攻撃力は1900だ。」

カードガンナー

ATK400→1900

墓地にカードを送ると同時に攻撃力を1900までアップさせる。下級モンスターの中でも最高と言える攻撃力だ。

「カードを2枚伏せてターンエンドだ。エンドフェイズに『カードガンナー』の攻撃力は元に戻る。」

竜二

LP4000

モンスター

カードガンナー

ATK400

魔法・罠

伏せ2枚

「俺のターン！」

「スタンバイフェイズ、【針虫の巣窟】を発動！ デッキからカードを5枚墓地に送る。」

更にデッキからカードを墓地に送る。1ターン目ですでに10枚

近くのカードが墓地に送られている。

「随分カードを墓地に送るんだな。デッキ切れおこしちまうぜ。」

「んなへマはしねーよ。おつ、いい落ちじやねえか…墓地に送られた『エクリップスワイバーン』の効果発動！ このカードが墓地に送られた時、デッキからレベル7以上の光、または闇属性のドラゴン族モンスター1体を除外する！ 俺は『レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン』を除外！」

「『レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン』…!? つづることはドラゴン族のデッキか？」

「どうだかな…デュエル進めりや分かるんじやねえか？」

竜二 SPC1→2

悠吾 SPC1→2

『ドラゴン族デッキなら早いところ手を打たないと高打点モンスターがポンポン出てくる。でもこの手札じゃ…』

今ドローしたカードを合わせてみても展開出来そうなモンスターはない。かといって魔法カードで突破しようにも今はSPCが少なく使えるカードがない。

「どうした!?こんな時に考え方か?」

攻め方を決めあぐねていた悠吾を見かねて竜二がヤジを飛ばす。

「俺は『電々大公』を通常召喚!バトルフェイズ!『カードガンナー』を攻撃!」

S R 電々大公

A T K 1 0 0 0

電々大公が手に持っているでん太鼓で『カードガンナー』をぶつ叩いて粉碎する。先制パンチは決まつたがアドバンテージを稼いでいるのは竜二だ。このくらいのダメージは意に介さない。「おつと!まあこれくらいはしようがねえか」

竜二

L P 4 0 0 0 → 3 4 0 0

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

悠吾

L P 4 0 0 0

モンスター

S R 電々大公

A T K 1 0 0 0

魔法・罠

伏せ 2枚

「どうした?随分控えめじゃねーか!でもこつちは遠慮しねーぞ!俺のターン!」

悠吾 S P C 2 → 3

竜二 S P C 2 → 3

「まずは『SP-エンジェル・バトン』を発動!カードを2枚ドローして手札から1枚墓地に送る。」

デツキが回らない悠吾に反して竜二は流れるように手札交換、墓地肥しをしていく。そしてドローしたカードと墓地に送ったカードを見てニヤリと笑う。

「おい、ユーロー！まだ始まつたばかりだけどボヤボヤしてつとこのターンで終わつちまうぞ！」

「キーカードを引いたか…」

まだ3ターン目だが竜二の墓地にはカードが溜まっている。何か仕掛けてきても不思議ではない。

「ああ、いくぞ！墓地の《エクリップス・ワイバーン》と《聖刻龍ートフェニドラゴン》を除外して《ダークフレア・ドラゴン》を特殊召喚！」

ダークフレア・ドラゴン

ATK2400

「《エクリップス・ワイバーン》が除外されたつてことは…」

「そうち！除外されてる《レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン》を手札に加える。」

「《レダメ》といい、墓地肥やしそこの召喚条件…デツキは【カオスドラゴン】つてどこが…」

「正解…。だけど主役はまだ出番じゃねーぜ。俺は墓地の《アックス・ドラゴニユート》と《暗黒龍コラップサー・ペント》を除外して《ライトパルサー・ドラゴン》を特殊召喚！」

ライトパルサー・ドラゴン

ATK2500

フィールドに白と黒のドラゴンが並び立つ。デツキ名の【カオスドラゴン】を象徴するドラゴンと言つてもいい。

「俺はまだ通常召喚をしてない！手札から《ギャラクシーサーペント》を通常召喚！」

ギャラクシーサーペント

ATK1000

「《ギャラクシーサーペント》はチユーナーか…」

「その通り！俺はレベル6の《ライトパルサー・ドラゴン》にレベル2の《ギャラクシーサーペント》をチユーニング！シンクロ召喚！レベ

ル8 『混沌魔竜カオス・ルーラー』!!

混沌魔竜 カオス・ルーラー

A T K 3 0 0 0

ここに来て初のシンクロ召喚。その攻撃力は3000と大台にのっている。

「こいつが俺の新しいエースモンスターだ！特殊召喚時の効果発動。それにチーンして墓地に送られた『ライトパルサー』の効果も発動！まず『ライトパルサー』の効果で墓地の闇属性ドラゴンを特殊召喚する！俺は『ダークストーム・ドラゴン』を特殊召喚！」

ダークストーム・ドラゴン

A T K 2 7 0 0

竜巻を纏った暴風竜と言うべきドラゴンが召喚される。おそらく墓地肥しの段階で墓地に送られていたのでだろう。

これで竜二のフィールドには上級ドラゴンが3体。だがまだ終わらない。

「続いて『カオス・ルーラー』の効果でデッキトップからカードを5枚墓地に送り、その中の闇か光属性のカードを手札に加える：けどどう何度もいい落ちとはいかねえか。魔法と罠ばつかで加えるカードがない。」

先程とは打つて変わつて墓地に送られたカードは魔法や罠カードだけのようだ。運がないと言えばそしが流れは竜二にある。その上まだ切り札を召喚していない。

「さアていよいよ主役の登場といきますかあ！フィールドの『ダークフレア』を除外して『レッドアイズ・ダークネスマタル・ドラゴン』を特殊召喚！」

レッドアイズ・ダークネスマタル・ドラゴン

A T K 2 8 0 0

咆哮と共に現れたのは全身を鎧に包まれた黒いドラゴン。攻撃力もさることながらその真髄は効果にある。

『レダメ』の効果で墓地から『ライトパルサー・ドラゴン』を特殊召喚！」

ライトパルサー・ドラゴン

ATK2500

墓地からドラゴン族モンスターを特殊召喚するという単純だが強力な効果。その緩い召喚条件とも相まってドラゴン族を多用するデッキには必要不可欠ともいえる。

「ドラゴンが4体…！」

攻撃力2500以上の上級ドラゴンが4体。いくらソリツドビジョンとは言え物凄い圧力を感じる。

『クソつ…』の状況じやあもう…』

『《カードガunner》を破壊するためとはいえ《電々大公》を攻撃表示は迂闊だつたな。バトルフェイズ！まずは《ライトパルサー》で《電々大公》を攻撃！』

「これを通すとヤバい！ 戻発動！ 《ハーフ・アンブレイク》！このターン《電々大公》は戦闘で破壊されず受けるダメージも半分になる。」

「なるほどなあ、防御手段を持つてたってことか。だが俺の攻撃に耐えられるかな？一撃目！」

『《ライトパルサー・ドラゴン》の口から光線が放たれ《電々大公》を直撃する。本来なら消しとんでもしまうが、カードの効果で場に残る。

悠吾

LP4000→3250

『《ダークストーム・ドラゴン》で《電々大公》を攻撃！ 戦闘破壊はされないがダメージは受けてもらうぜ。』

悠吾

LP3250→2400

少しづつだが確実にライフが削られていく。だがまだ2体のドラゴンの攻撃が残っている。

『3撃目え！ 《レッドアイズ・ダークネス・メタルドラゴン》で《電々大公》を攻撃！』

悠吾

LP2400→1500

赤黒いブレスで三度《電々大公》を焼き尽くす。その衝撃でハンドル切るのが遅れてしまいDホイールがクラッシュにかかる。だがそれなんとか立て直す。

「ラストオ！《カオスルーラー》で《電々大公》に攻撃！」

光と闇が合わさったブレスが炸裂。攻撃力3000というだけあつて衝撃は今までで1番強かつた。土煙がもうもうと立ち込める中なんとか体勢を立て直す。

悠吾

L P 15000→5000

「首の顔1枚だな。カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

竜二

L P 40000

モンスター

ライトパルサー・ドラゴン

A T K 2500

ダークストーム・ドラゴン

A T K 2700

レッドアイズ・ダークネス・メタルドラゴン

A T K 2800

混沌魔竜 カオスルーラー

A T K 30000

魔法・罠

伏せ2枚

ライフとモンスターをかろうじて残したはいいものの状況はかなり悪い。ドローしようとデッキに手をかけるが手が震える。

「お、俺のターン…」

ゴーストとのデュエルやエリとのデュエルが頭の中にフラッシュバックする。不利な状況で自分にターンが回ってくるこの状況はあの時によく似ている。また醜態を晒してしまったのかという恐怖が心を蝕んでいく。

「何をビビつてんだ？」

その考えを読んだかのように竜二が問いかける。

手が震えたのを見られたのか？いや、竜二は前を走っている。手元は見えないはずだ。

「なんだよ…急に何いってやがる」「気付いてないと思ってんのか？」

その言葉に悠吾は目を見開く。竜二の纏う空気が今までと明らかに空気が変わった。

「ゴーストとのデュエル後：いや、1ヶ月前くらいから違和感は感じてたんだ。」

1ヶ月前といえば丁度悠吾がこの世界に来たくらいだ。違和感がないようになんとか隠していたつもりだつたが気付かれていたようだ。しかしそく考えれば当然だ。姿が同じで、こちらの世界の記憶があるとはい、全く違う人物になつたのだ。全く同じ人物のように振る舞えるわけではない。

「お前が何に悩んでるのか、話したくないなら無理には聞かねえよ。だけどなあ…!!」

そう言うと前を走っていた竜二が勢いよくハンドルを切りぐるんとDホイールを反転させる。そしてそのまま後ろ向きで走っている。

「何を迷つてんだ！ユーゴオ!!」

静かな雰囲気から一転、声を荒げる竜二。ビシッと人差し指をこちらに向けその表情からは怒りの感情が伺える。

「え…？」

竜二の予想外な行動に間抜けなリアクションをとつてしまつた。

「俺がデュエルで諦めかける時、スランプになつてた時、お前はいつも『デュエルを楽しむもんだ。その気持ち忘れなきや強くなる！』そう言つてくれた…お前の言葉に何度も俺は救われてんだ…そのお前がそんなツラしてんじやねえ！ぶつぶれそうなシケたツラしてんじやねえよ!!」

口調は悪いが、その言葉からは竜二の熱い気持ちが伝わってくる。そのまま言葉を続ける。

「負けるのが怖えなら、強くなりやあいい。ゴーストが怖いならあい

つらブチのめせるくらい強くなればいい！どんなに絶望的な状況でも最後までデュエルを楽しむことを忘れねえ、俺の知つてる神代悠吾っていう男はそういう男だ!!』

ドクンっと心臓が脈打つた。まるで自分の中にある何か熱いものが叩き起こされたかのような感覚だ。その瞬間、悠吾の意識が飛び、気がつくと何もない真っ白な空間にいた。どうやらここは悠吾の潜在意識のような場所のようだ。

しばらく周りを見渡していると次第に様々なシーンが映像化されて流れていく。それは彼がトラックにはねられる前、大学生として暮らした頃の記憶。今となつては彼の生前の記憶というべきだろうか。そして二つ目は悠吾がこの世界に来る前、自分が人格を乗つ取る以前に神代悠吾として暮らしていた彼の記憶。

この2つの記憶が混ざり合つて悠吾の周り中を駆け巡つていく。初めて遊戯王をプレイした時や、大会で優勝したとき、初めてDホイールでライティングデュエルをしたとき等々であつたが、共通していたのが共通したいたのがいつも『デュエルを心から楽しんでいること』だつた。

ふと気づくと目の前に人が立つており、それは自分と同じ顔をした人物だつた。直感で、彼は自分がこの世界に来る前にネオドミノシティに住んでいた神代悠吾だと思った。

『その気持ちがあればお前は誰にも負けねえよ！』

そう言つて彼はニカッと笑うと1枚のカードを差し出す。それは悠吾のエースモンスター、『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』だつた。

『ありがとな』

それに応えるように悠吾も返事をかえす。

その一言と共にカードを受け取るともう1人の悠吾は光の粒となつて消えてしまう。だが彼が消滅したわけではなく、悠吾の中に流れ込んでくるのを感じた。今2人は完全に1つの存在になつたと分かつた。

意識が現実世界に引き戻される。Dホイールの上、猛スピードで流

れる景色。そう、今は竜二とのライディングデュエルの途中だ。

あの真っ白い空間にそれなりに長い時間いたと思っていたが、現実世界では一瞬のことのようで、今は竜二に檄を飛ばされた直後だ。

「るつせーんだよ……んなこと言われなくとも分かってるつーの!!」

口では悪態をつきつつもその目にはもう以前のような迷いはなく、口元には笑みが溢れている。グツと一気にアクセルを踏み込み、後ろ向きで走っている竜二を追い抜く。

「あー・テメ…追い抜きやがった…！」

慌てて竜二も体勢を整えて、悠吾を追いかける。先程まで向かい風だつた風も今は追い風として悠吾を援護してくれている。

「俺のターン、ドロー!!」

悠吾 SPC 3 → 4

竜二 SPC 3 → 4

勢いよくカードを引き、ドローしたカードを確認してそのまま発動させる。

『SP-クラッシュ&ドロー』を発動！SPCが4以上ある時、お互いに手札を全て捨て、捨てた分だけデッキからカードをドローする！』

オリジナルSP

SP-クラッシュ&ドロー

SPCが4以上ある場合、お互いのプレイヤーは手札を全て捨てて捨てた分だけカードをドローする。

「こ」で『クラッシュ&ドロー』か！いいカードを引きやがつたな』

「俺は4枚捨てて4枚ドロー！」

ドローした4枚は今までが嘘のように噛み合う手札だ。頭の中でいくつもルートが浮かぶ。まるで世界が一変したかのようだ。

「さあ、反撃開始と行こうか！お楽しみはここからだ!!」